

美濃加茂市民ミュージアム

紀 要

第11集

2012

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第11集

目 次

美濃加茂市川合町採集の下呂石転石

齊藤 基生 ————— 1

津田左右吉幼少期の教養形成の環境について

「子どもの時のおもひで」の記述を中心に

可児 光生 ————— 7

「身近な自然についての不思議」を「展示」する

2011 年度「おどろき はっけん みのかも自然展」を振り返る

西尾 円 ————— 15

岡本一平「新水や空 俳優の部」

— 出版物と早稲田大学坪内博士記念博物館所蔵の原画

菊地 由花 ————— 1

美濃加茂市川合町採集の下呂石転石

齊 藤 基 生

はじめに

筆者は、紀要前号で述べた様に、美濃加茂市民ミュージアム開館準備段階から、考古学分野の展示に関わってきた。中でも、地元の石器時代を代表する剥片石器の素材、下呂石に着目してきた。そして、下呂市湯ヶ峰の露頭からの川原下り、市内古井町下古井の川原での定点採集、遺跡出土の剥片の観察、河岸段丘礫層中の下呂石など、様々な調査を行い、展示に反映させてきた。

ところで、市内の川原なら下呂石の転石は採集可能だが、これまでは太田橋下流の川原しか見てこなかった。そんな中、2011 年末、川合町の赤池古墳の確認調査が行われた際、初めて関西電力川合発電所下流の川原へ降りる機会があった。短時間に多くの下呂石の転石を採集することができ、しかもこれまで市内の川原で得られたものに比べて大きく、表皮の様子も若干異なっていた。

今回は、川合町の川原で得られた下呂石の転石の採集結果を報告するとともに、露頭から最下流部までの重さの変移についても触れる。

1 採集地点の概要

今回採集した川原は、今渡ダムの堰堤直下から、新太田橋までである(写真1)。露頭からの距離は、おおよそ 80km 弱である。



写真1 川合町の川原(2012.1.30 対岸より)

川原の基盤は、市民ミュージアムの常設展示室で入館者を迎える 1900 万年前のカニサイの足跡が発見された、中村累層である。その上を円磨度の進んだ円礫が覆い、さらに段丘崖寄りには砂が堆積している。砂地には灌木が生え、そのことで洪水の際に水の勢いが抑えられ、さらに砂の堆積が進み、より植物の繁茂を促す循環になる。

川原には、小砂利から長径 20 ~ 30cm の大小様々な円礫が見られ、扁平なものは下流に向かって瓦を重ね並べた様に広がっている。

礫種は、飛驒・木曽川から供給された砂岩や濃飛流紋岩が目立ち、そうした中に湯ヶ峰の噴出物と一緒に下呂石が紛れ込んでいる。また、両大河とも流域でチャートを産出しているが、石器製作に耐え得る様な良質のチャートの円礫は、意外にも下呂石より少ないくらいである。

2 採集した転石

計3回の採集は、すべて筆者一人で行った。川原は今渡ダム直下から木曽川右岸に沿って、細長く下流へ広がっている。灌木が繁茂している所は観察が困難なので、今回は比較的礫が顔を出している川寄りを新太田橋付近まで観察した。ただ、採集確率が新太田橋付近から急激に低下したので、それより下流へは足を伸ばさなかった。ほぼ長さ 300m、最大幅 50m 程の範囲を見て歩いた(図1)。

なお、今回採集した川原は川合町から御門町にかけて広がっているが、一続きのものであり、便宜上川合町として一括報告する。

1) 第1回目(2011.11.3)

10:50 ~ 11:40 のわずか 50 分の間に 30 点採集できた(写真2)。これまで一度も足を踏み入れたことのない川原とは言え、従来の市内の踏査では予想もできない数と、大きさであった。久々に興奮を抑えられなかったが、時間の余裕がなく、歩いた範囲は堰堤寄りの川原にとどまった。

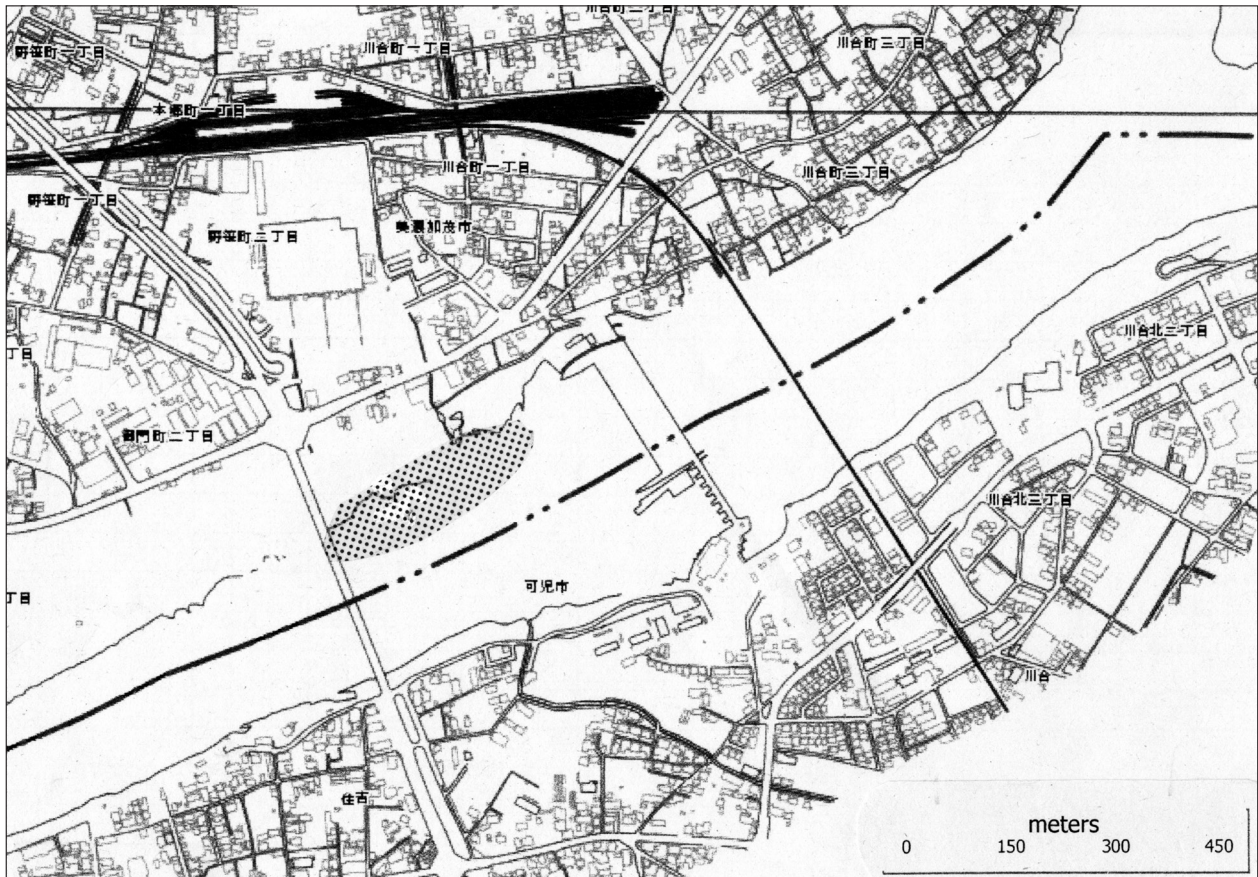


図1 川合町採集範囲位置図(アミトーン部分)

法量は、長径 2.7 ～ 8.5cm、平均 5.0cm。中径 1.9 ～ 7.1cm、平均 4.1cm。短径 1.2 ～ 5.3cm、平均 3.0cm。重さ 11 ～ 389g、平均 106g。

大きいものは表皮にぶつかりで生じた剝離面の名残が目立ち、中～下流域というより、上流域の様相に似ている。

2) 第2回目(2012.1.25)

第1回目が時間不足で上流寄りしか見られなかったため、年明けに再度採集に出かけた。時間は、12:15 から 12:45 の 30 分間程で、36 点採集できた。やはり初めて歩く所で、前回同様時間の割りに、数多く採集できた(写真3)。

法量は、長径 2.2 ～ 10.7cm、平均 5.3cm。中径 1.6 ～ 8.8cm、平均 4.2cm。短径 1.1 ～ 7.4cm、平均 3.3cm。重さ 4 ～ 918g、平均 144g。

前回以上に大きめのものが多く、平均値はやや上がった。

3) 第3回目(2012.1.30)

これまで2回歩いたものの、新太田橋寄りの未踏査部分が気になり、もう一度出直した。ほぼ御

門町内に入る。時間は、9:08 ～ 10:05 の約 1 時間 をかけ、13 点採集できた。それまでの 2 回とは違い、採集確率は大幅に下がり、サイズも小さくなった(写真4)。なお、この回で一番大きかったもの(同右下角)は、初回に歩いた上流寄りで採集したものである。これは真っ二つに割れた円礫だが、断面は新しいにもかかわらず、対になるもう一方は見当たらなかった。

法量は、長径 3.8 ～ 12.1cm、平均 6.1cm。中径 2.7 ～ 10.6cm、平均 4.6cm。短径 1.8 ～ 6.0cm、平均 2.2cm。重さ 25 ～ 585g、平均 144g。わずか 100m も離れないだけで、なぜこの様に急激に様相が変わるのか、分からない。

4) 小 結

今回採集した計三回の転石を概観する。

円磨度はすべて円礫の範疇に収まり、形状は球体ではなく、鶏卵状からやや細長い棒状が多い。扁平度は 1.2 ～ 2.2 である。

表皮は、大振りのものはぶつかりにより生じた剝離面の名残が目立つ。また、爪傷は上流域程深

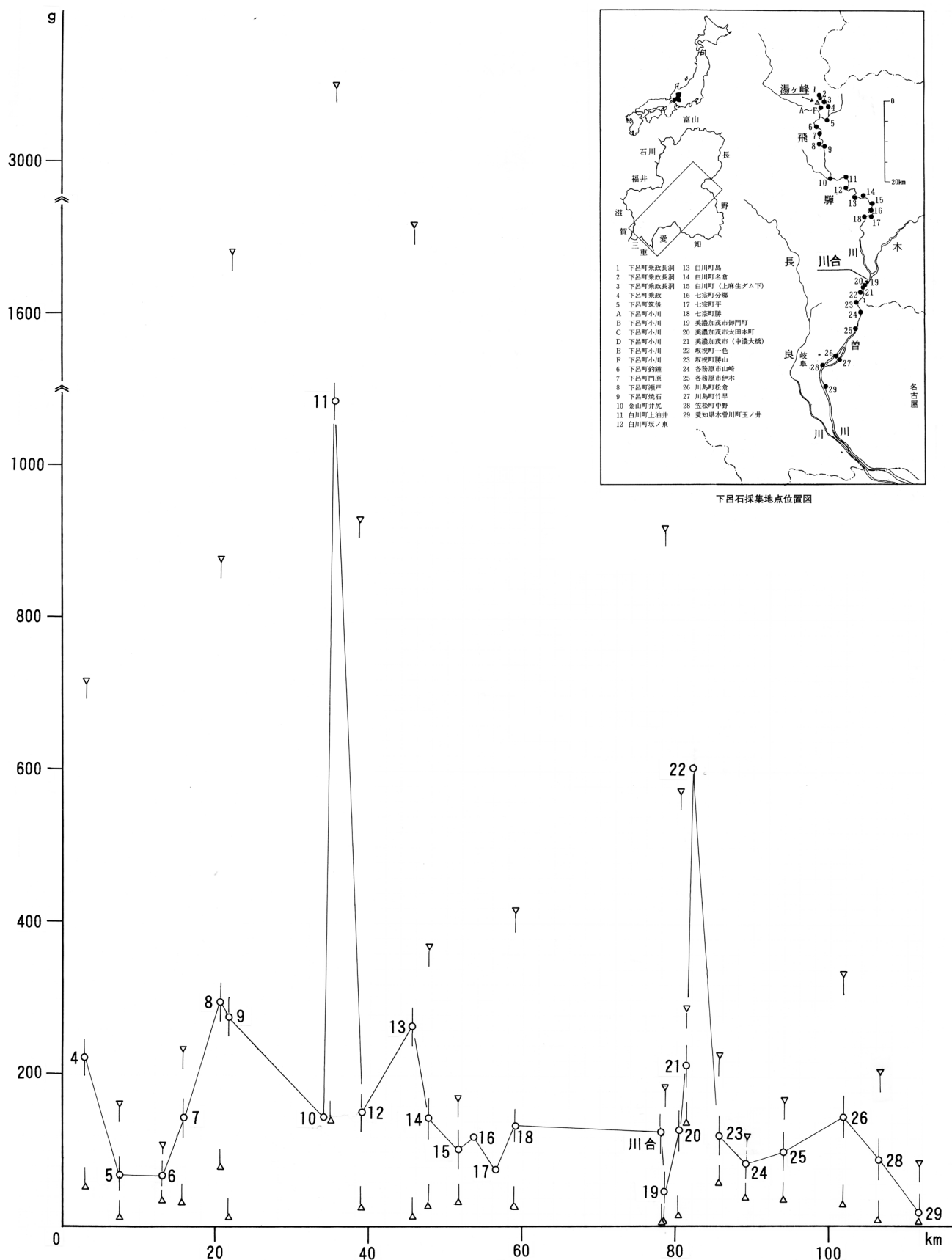


図2 採集地点別重量グラフおよび位置図

くはない。中・小振りのものは円磨度も進み、非常に滑らかである。色は、遺跡出土のものが風化で白くなっているのに対し、川原のものは水に揉まれて風化が進まず、やや濃いめの灰色を呈する。

法量は、露頭から 80km 程下流の割りには、川合町より下流の川原で採集できたものに比べ、大きなものが目立つ。

3 重さの変移

今回川合町の川原で採集した転石は、市内のそれより下流の川原に比べ、大きいものが目についた。そこで、露頭から最下流部までの川原で採集した転石について、1993 年の資料（※1）を元に露頭からの距離と重さの関係を検討する。

得られる剥片の大きさは原石の長さ、幅、厚さと密接な関係にあるが、グラフの煩雑さを避けるため、今回は重さで法量を代表させた。

なお、各地点での採集点数は、1 点から 57 点とばらつきが大きく、採集に要した時間や歩いた川原の広さもばらばらである。また、この報告後に複数の人が様々な川原で採集した資料もあるが、それらの採集状況や数量、法量の検討はしていない。そのため、このグラフが各地点の性格をどの程度正しく反映しているか、統計処理上の信頼度に問題は残る。それでも、現在のおおよその状況は表していると考える。

グラフは、縦軸に重さ、横軸に露頭からの距離を取り、各地点ごとに平均値を○、最大値を▽、最小値を△で表記した（図2）。なお、○記号脇の数字は、同図右上の位置図の番号に対応する。また、川合地点の値は、3 回分すべてを合わせたものの平均値、最大値、最小値である。

見通しとしては、露頭から下流に向かって川の流れて運ばれていく間に、繰り返し他の石とぶつかり合って割れて小さくなっていく、つまり暫時平均値が下がっていくと予想される。

ところが、1993 年報告資料の平均値は、予想通りの変化は示さなかった。上流、乗政川の平均値は意外に低く、旧下呂町瀬戸、同焼石、白川町島で 200g を越すものの、多くは 150g 前後でほぼ横ばいになり、最下流部の愛知県一宮市木曽川

町玉ノ井で急激に小さくなる。

今回のグラフに表れた不規則な変化は、採集点数やその内容に大きく左右されている。つまり、最大重量が 1 kg を越える様な下呂市焼石、白川町上油井、同町島では、それに引っ張られて平均値も非常に大きくなる。逆に、最下流部の一宮市木曽川町玉ノ井では、小さなものが多くて平均値が下がってしまい、一見利用できないものばかりの様な印象を与える。ただ変動はあるものの、大きく見れば下流に向かって最大値は小さくなり、最大と最小の幅が徐々に狭くなっていく。

礫の大きさの分布について。下流に向かって単純に小さくならないのは、露頭から転がり落ちた時点での大きさが決め手となる。最初が大きければ、その後同じ確率で割れていったとしても、より大きなまま遠くまでたどり着くことができ、その逆もある。また、常に真つ二つに割れるとは限らず、一部が剥片状に割れれば、例え最上流でもその時点で小型化が始まる。

そして、川幅や川底の傾斜など流速の作用により構成される他の礫のサイズの変位内で、下呂石も存在する。その結果がグラフに反映している。

重要なことは、その川原の平均値よりも、最大値である。より大きな原石からはより大きな剥片が得られ、より大きな石器を作ることができる。仮に上・中流域で小さな下呂石が目についたとしても、使い物にならなければ石器時代人は拾わなかっただけである。現在人の我々は、研究資料として細大もらさず目についたものを採集し集計するから、小さな転石に振り回されることになる。

4 まとめ

市内の遺跡から出土する剥片類の表皮を観察すると、これまでの太田橋より下流の採集例から判断して、その大きさや形状、爪傷などからより上流で採集されたと思わせるものが見られた。そこで、石鏃など小型の剥片石器の素材は身近な川原で採集できる転石を利用し、大型のスクレイパーなどを作る時は大きな素材を得るために、露頭の角礫や大きな転石を求めて上流域まで出かけて行ったのではないかと想像していた。

ところが、今回川合町の川原で大振りの転石が採集できたことで、遺跡出土の剥片類から想定される大きな転石も、案外身近な市内の川原で採集されていた可能性が出てきた。

これまでも機会がある度に触れてきたが、石器時代当時の川原とこれだけ多くのダムが作られた現在の川原の状況は、大きく違っているはずである。あまりにも当たり前の話だが、そのことを考慮せずに判断する怖さを改めて実感した。

それにしても、今回の川合町の川原で、ダムに近い上流側では大振りのものが多く、ほんの少し下流に行くだけで小さくかつ少なくなるのはなぜか、それがダムの堰堤と関係があるか否か、今もってまったく分からない。今後は、この地点での定点採集を重ねることで、新たな情報を得たい。

おわりに

2012年2月20日、下呂市焼石の川原を30分程二人で歩いたが、長さ3cm程の垂円礫が1点採集できたのみであった。どうやら、この付近では湯ヶ峰の露頭からの崩落が止まった後、供給

の最後尾が通り過ぎてしまったかもしれない。もしそうならば、いずれ美濃加茂市内でも下呂石が流れ着かなくなってくる時が来るであろう。

今回もまた、美濃加茂市民ミュージアム藤村俊学芸員をはじめ職員の方々には、いつもながら写真撮影や図版作成、資料や情報の収集にお手を煩わせた。記して、皆様にお礼申し上げる。

(さいとう もとなり 美濃加茂市文化財保護審議委員)

【注】

- 1 齊藤基生「下呂石 一飛驒・木曽川水系における転石のあり方」『愛知女子短期大学研究紀要 第26号 人文編』、愛知女子短期大学、愛知県日進町、1993年、pp139-157。

挿図出典

- 図1 2008年、美濃加茂市都市計画全図、1/1万、一部複製、加筆。

- 図2 採集地点位置図は(※1)文献、p155、一部加筆。なお、図内の採集地点名は、合併前の旧町名のままである。



写真2 川合町1回目採集下呂石



写真3 川合町2回目採集下呂石



写真4 川合町（御門町）3回目採集下呂石

津田左右吉幼少期の教養形成の環境について

～「子どもの時のおもひで」の記述を中心に～

可 児 光 生

1. はじめに

津田左右吉の没後 50 年にあたり、早稲田大学と美濃加茂市民ミュージアムは「津田左右吉展」を 2011 年 10 月から 2012 年 3 月にかけて開催した。今なお大きな位置を占める津田の研究成果を検証し、また津田の人的な交流、新たな人間像を伝える展覧会となった。

津田は、晩年「子どもの時のおもひで」（昭和 24 年（1949）9 月刊行〔津田 76 歳〕の『おもひだすまゝ』の附録に書き下ろしで収録）¹と「子どもの時のおもひで以後」²を回想録として残している。いずれも体験時から多くの年数を経ており、執筆当時の思いや解釈が少なからず入っているにせよ、少年時代の生活の鮮烈な記憶と心境が生々しく書かれた貴重な文献であることは間違いない。

津田の生い立ちや幼少期の様相については、この展覧会でも一部紹介したところであるが、本稿では、津田がのこしたこの 2 つの回想録を中心に、郷里を離れるまでの間（明治 19 年〔1886〕文明小学校卒業）の家庭や学校などの教育環境、学習体験などをとりあげ、のちの研究や思想構築の基盤となる教養がどのように形成されていったかを考えてみたい³。

2. 幼少期の教育環境について

（1）文明小学校と文明開化について

明治 5 年（1872）の学制発布により、加茂郡福島村（現在・加茂郡川辺町）に「文明義校」が設立され、のち則光村（現在・美濃加茂市下米田町）に移り、「文明小学校」⁴と改称した。現在の下米田小学校の前身である。

「先生は三人であった。本当の訓導は一人だけで、モリ先生といふのであった。…その外に助教といはれてゐた先生が二人、その一人は、これもナゴヤの旧藩士で、…もう一人は父であった。」（「子どもの時のおもひで」（p.14）、以下「子どもの時のおもひで」からの引用は『全集』第 24 巻のページ数のみ示す。）

津田は文明小学校で、森達、野田有尚、父の津田藤馬の三人に教わった⁵。

「学校で祝祭日の儀式といふやうなものは行はれなかった。新年にも無かったやうである。国旗が揚げられたかどうか、思ひだされぬ。…後年のやうに国家的意義のある祝日をやかましくいふことは、学校でもせられなかった。」（p.14）

というのが津田の学校の雰囲気についての印象である。

明治 23 年（1890）の教育勅語の発布以降は忠君愛国道徳精神が徹底されるようになるが、明治 10 年代、津田が通っていた学校は明治初年の文明開化の雰囲気と自由で開放的な空気が漂っていたと思われる。家永三郎はこれに関して「明治 20 年以後の国粋主義復活以後の学校教育では到底考えられないところが多かったやうである。」「この前後の学校教育が、その後の教育思潮に比べていかに異質な内容をもっていたか」などと述べている⁶。

一方、文明開化は津田の家庭でもあった。

「床の間に定紋のついた具足びつがおいてあったが、…この具足びつには具足が入れてなかった。その代り毛おりもので作ったいろいろの衣類が入ってゐた。」「わたしが燕尾服が具足びつにいられてゐるのはをかしいといったら、お婆さんが、燕尾服は今の具足だからこれでよいだらう、といったことをおぼえてゐる。」（p.18, p.19）

この話はまさに「津田家の文明開化」を象徴するものであろう⁷。

津田は、次のようにも言っている。

「明治の初年の「文明開化」の風がこんなありさまでこんな「やまが」に吹きこんで来たのである。」（p.19）

当時、小学校で用いられていた教科書の類について津田は、

「学校での教科はやはり本を読むことが主であつたらう。…『小学修身書』といふものがあつたやうな気がするが、それもたしかでない。…たゞはつきり思ひ出すことのできるのは、『岐阜縣地誌』といふものと『太古史略』といふものとの二つがあつ

たことである。…薄い本で黄いろな表紙のつけてあったこの二冊だけは、ありありとその姿が目につかふ。…日本の歴史については、或はサンヨウ（山陽）の『日本外史』をこのころに読みはじめて…」(p.40, p.41)

と述べている。大正14年(1925)6月調べの「文明義校書籍目録」⁸をみると、122冊の蔵書のなかから『日本外史』『太古史略』『岐阜県地誌』などが確認できる。時代がかなり下っており、これが実際に津田の時代に使われていたものとは言えないが、明治から大正にかけての小学校でこれらの教科書が常備され教育がおこなわれていたことを物語るものである。

(2) 恩師・森達について

小学校時代の恩師・森達（もりとおる・号好齋）⁹は、山崎派の細野要齋の門人の儒学者で、文明小学校の訓導（校長）として津田の指導にあたった。津田の自叙伝や日記のなかに森のことが頻繁に記述されている。心からの恩師として尊敬し、津田は晩年、次のように述懐している¹⁰。

「昔の学問の仕方というのは、先ず何しろ本を読むことだけ。…色々な本の講義も聞きましたけれども、…大抵忘れてしまうんです。…ところが不思議なことにですね。大きくなって何十年もたった後にです。ふぁとそれが思い出されることがある。そういう文字がでできますねとね。これが昔あそこで、米田の学校で、森先生に教えられた言葉だなーと思出すことがしばしばある。」

津田は森から学校においてもまた授業以外でも漢文の素読を受け、朱子の講釈を聞いている。森は儒学者として指導にあたったが、それだけでなく、津田の一般的な教養習得の面で大きな影響を与えた。

「 Mori先生からうけた感化は大きかったと思ふが、それは儒教の教によってでもなく、ヤマザキ学派の流儀によってでもなかった。」(p.44)

「(山小屋の床の間の軸の落款に養齋とある。)養齋というのは、幕末から明治の初年にかけて、ナゴヤの藩学の明倫堂の督学であった細野忠陳のことであり、三宅尚齋の学統に属するヤマザキ派の学者である。…ばくは、これを、子どもの時の小学校の校長であり八年の間その教をうけた森好齋先生から頂いて持ってゐるのである。」(「山小屋の床の間」初出誌『新潮』昭和

32年9月、『全集』第21巻、p.575。)

大正2年(1913)、津田は森に対し『神代史の新しい研究』(大正2年10月5日発刊)を贈呈したようである。森は津田に対し次のようなお礼の葉書¹¹を出している。「斬新なる御卓見」と評価し次に発表予定の朝鮮史への期待を伝えている(同年、『朝鮮歴史地理』第1巻・第2巻を発刊)。

「東京麹町区紀尾井町九 津田左右吉様 愛知西春日井郡杉村¹² 三六六 森達」(大正2.10.23 消印)

「御□遠ニ打過厚く御詫仕候。老躰未タ餘命を保ち居候間、御省慮被下度候。扱今般御珎書御贈与ニ預り直ニ拝讀昼夜兼行候處、斬新なる御卓見ニハ先ツ感服仕候。尚熟讀玩味セハ益佳境ニ入ヘシと樂シミ居候。次テ朝鮮史モ御著述之趣、是又御出板(ママ)之上ハ何卒拝讀仕度、今より鶴首致し居候。先ハ御礼迄、早々。尚々、貰ひ合せの物小包ニテ差出し候。御笑納被下候ハ、幸甚ニ候。」

(3) 父・藤馬について

津田の父・藤馬(1843～1899)は、竹腰家(尾張藩付家老)を藩主とする今尾藩¹³の藩士であった。明治維新までの約10年間、江戸の藩邸で勤務し、維新後は領地であった加茂郡栃井村に移り住んだ。津田も述懐しているように、今尾から栃井村及び周辺に帰農した士族は20軒ほどあったようであるが、のちに津田家を残してすべてが栃井村から離れてしまっていた。村の中で孤独な士族であった。時代はやや下るが、明治31年(1898)、左右吉の妹・はるが小学校を卒業した時の名簿¹⁴によると、父兄の族籍職業欄には、明治20年(1887)からの12年間で、「士族」と記されているのは津田藤馬のみであり、他はすべて「平民」と記されていることで、それは裏付けられる。

藤馬だけが「やまが」に残った理由は不明であるが、社会的地位が確保された文明小学校の教員(助教)という職業についていた¹⁵ことも原因の一つと考えられる。

「父が、ヨナダの村々から頼まれたか勧められたかして、その教師になることになり、そのために、そのころ臨時に設けら

れてゐた教員養成所のやうなものに入学した。場所は二、三里あまり隔たつてゐるハチヤ（蜂屋）といふところであつた、と聞いたやうなきがするが、これもたしかでない。（この養成所が何といふ名であつたかも、たしかには知らぬが、或は師範学校といはれてゐたかと思ふ。）」（p.12）

岐阜県では、明治初めの小学校設立にともない、資格を有する教師の養成を図るため明治6年（1873）、師範研修学校を設立（同8年に岐阜師範学校と改称）、同8年2月に加茂郡上蜂屋村に出張所を開設した¹⁶。最初の入学者名簿（16名）に次のように藤馬の名が見え¹⁷、津田の記憶が裏付けられる。

「福島村 文明学校 東栃井 津田藤馬 三二・四（筆者 注：歳）」

明治維新により、士族にとってそれまで与えられていた社会的、経済的特権が政策的に剥奪されていった。そういう状況で、一定の教養学識を必要とし、公的権力によって権威付けられた「官吏」「警官」「軍人」「教員」といった職業は帰農士族の「転身先」の一つであつた¹⁸。藤馬もその一例であるといえよう。

父・藤馬と村のことについて、津田は次のように述べている。

「文字の知識がいくらかはあり、さうして、どうにかかうにか「士族」の体面をもちこたへてゆくことのできた父は、むかしのならはしのまだ無くなってゐなかつた明治時代の始め、また都会の地から遠くはなれてゐて気風があまりすさんでゐなかつたこの土地のこととて、まはりの人から或る程度の尊敬をうけてゐた、といふことである。父のほうでも、できるだけ土地に同化しまはりの人となじむやうにしてみたらしい。」（p.6）

それを裏付けるように、藤馬は明治20年代、地域にある溜池管理の「地主総代」を勤めたり、水量立会いの役をする¹⁹など、帰農後、士族という異質の存在でありながらも、「武士」としての気概と責任感を持ち、当時の村落社会の一員としての役割を果たしていた。²⁰

（4）家庭について

津田は家庭について次のように語っている。

「（家では）むかしの武士ふうの特殊のしつけは何もうけなかつた。」（p.16）「もっとも、家がもと武士の家であつたとい

ふことは、何かにつけて子どものわたしにはわからぬことはなかつた。父は毎年一度、秋風のたちそめるころになると、刀の手入れをした。」（p.17）「むかしの武士ふうの年中行事は、家ではほとんど行はなかつた。」（p.19）

「わたしの生れたのは下級武士の家であつたが、生れた時はもう武士のよのなかではなくなつてゐた明治の六年であり、農村に移住し農家の間に立ちまじつてもゐたので、武士の生活らしい空気は家の内にも殆ど無かつたであらう。子どもの時でも、武士風のしつけなどはうけなかつたやうに思ふ。」（「刀剣」1965年、『全集』第21巻、p.581）

左右吉自身に武士の家であることの自覚があつたものの、父・藤馬には士族としての格別の振る舞いがなく、子どもに対しても武士風のしつけを一切行わなかつた。武士風のしきたりや伝統がなく、年中行事もない家庭であつた²¹。

因習にとらわれない家庭、文明開化で新しい空気、自由な学校、これらの要素は、物事を合理的に見、客観視して研究の対象とする津田ののちの研究態度や姿勢に一定の影響を与えたと考えられる。

また、

「わたしの家には、文芸の空気など少しも無かつた。」「わたしの家には、これといふほどの書画のたぐひも無かつた。」（p.47）

「われは幼時より、厳格なるといはむよりは寧ろ乾燥なる家庭に育ちたれば、又た特に質朴なれども鄙野なる田家の間に介在せる家庭に育ちたれば、われとうちいでて同じ年輩なる児童と遊び交らひしこと少なき代りに、あどけなくたはむれかはし幼時の記憶なく、又た楽しくなつかしき家庭の記念を有せず、…」（「日記」明治30年5月5日条、『全集』第25巻、p.219）

という記述からもわかるように、津田家に文化的環境があつたとは言えず、いわば無味乾燥した家庭生活だつたようである。

また、津田は、

「小さい時から家のうちにばかりゐたので、学校へゆくやうになつても、帰ると外へは殆ど出なかつた」「みんなはヒダ川で泳ぎをしたが、わたしはそのなかまにも入らなかつた」（p.21）

と、周りの子どもたちと交じり合わず、孤独な少年だつたようである。

3. 読書体験、接した書物

家永は、津田の明治29年（1896）から明治末までの日記から、青年期、多方面にわたつた津

田の関心を裏付ける読書歴を詳細に紹介²²しているが、少年期については特に触れていない²³。

津田の読書体験、接した書物について、二つの回想録から32点（青年期を含めると62点）の書物が確認できる。その内容は

A. 儒教関連などの漢籍類

『五経』『十八史略』『左傳』『蒙求』『文章軌範』『小學』『家禮』など

B. 歴史書や教科書類

『太古史略』『日本外史』

C. 江戸時代の物語類

『膝栗毛』『絵本小栗一代記』『水戸黄門仁徳録』など

D. 紀行文その他

『岐阜縣地誌』『紀行文（岐阜日日新聞）』

の4つに大きく分けることができ、このことについては既に報告している²⁴であるが、改めて一部を紹介しておきたい。

○『日本外史』について

「日本の歴史については、或はサンヨウ（山陽）の『日本外史』をこのころに読みはじめて、それによっていくらかの知識を得たのではないかと思ふが、それは或はもう一年ほどあとになってからのことかも知れぬ。」(p.41)²⁵

「おもしろかったのは『日本外史』であって、これは、どれだけの時間がかかったか忘れたが、全部読みとほしたらしい。」
「『日本外史』に出て来る人たちの伝記逸話や、その記事に関係のある詩や歌などをいろいろ教へて下され、時には人物の批評などもせられたので、この本を読むことのおもしろみがそのために特に深かった…」(「明治十年代の田舎の小学校」、『全集』第24巻、1965年、p.80, p.81)

『日本外史』は文政年間、儒者である頼山陽が平安時代から江戸時代開闢までの武士の興亡を中心に綴ったものである。漢文体形式でありながら、ドラマティックな展開と叙述が簡明であるため、特に幕末には愛読された書物である。明治に入っても人気は衰えず広く普及し、漢文の入門の教科書としても用いられた。津田の『日本外史』への関心は他の書物に比較して格段に高く、前に紹介した他にもたびたび記述が見られる。

「わたくしの先生からうけた感化は、さういふ講釈からでは

なくして、別の方面にある。小学校の教科書として日本外史が用ゐられてゐたが、先生はその授業の時に、読んでゐたところに関係のあるいろいろの歌や詩を教へて下された。あとから考へると平家物語や太平記などから取って来られたのであらうが、それがひどく嬉しかった。」(「諸生規矩階級、読書路徑」初出誌『図書』昭和16年10月、『全集』21巻、p.391～392)

『日本外史』が津田に与えた影響について、早川は「歴史は本職」と津田が気持ちを持つようになった一つの要因であったとして指摘している²⁶。又、李は「戦後、津田はイデオロギー偏重の歴史教育に対し、歴史的出来事や人物にまつわるいろいろなエピソードを伝え、歴史そのものに興味を抱かせる必要性を説いたが、これは自身の体験に基づくところが大きいであろう」とする²⁷。『日本外史』を含めた歴史書物の「天地間の一大劇場の活劇」は彼に大きな影響を与えた。

のちではあるが

「旧幕府」といふ雑誌を読むに、坐ろにむかしの忍ばるる心地す、「戊辰の夢」及び「南柯紀行」殊に感あり、幕末史、あこれ真に人間悲哀のこと、痛恨のこと、而して又た爽快のこと、而して又た是れおのづから天の道、人の命、国史中最も趣味ある時期、…」(「日記」明治30年5月4日条、『全集』25巻、p.216)

と記しており、津田は人間悲哀のある時代や歴史に高い関心を寄せていることがわかる。²⁸

○物語について

物語への関心については次のような記述がある。

「もっとも家に雑書がいくらかあったので、それを見つけると、読めるものは何でも読んだ。イツク（一九）の「膝栗毛」の端本を、どこからかひきずり出して来て、ひろひ読みをしたことを思ひ出すが、これは読むよりも絵を見る方がおもしろかったであらう。わらじを片足だけ買はうとして笑はれてゐるところのあったことをおぼえてゐる。ユグリハンガン・テルテヒメ（小栗判官・照手姫）の話とか、「水戸黄門仁徳録」とかいふやうなものも何度も通読した。」「もっとかういふものがあつたら、わたしもっと多く何かを読んだであらうに、それができなかった。勿論さういふものがあつても大人の詠む本である。そのころに、子どもの読む本ができてゐなかつたことは、いふまでもない。」(p.44, p.45)。

まさに鮮烈な記憶である²⁹。儒学のかたくるしい書物にくらべて異質のいわゆる娯楽的読み物であるが、津田はこれらをむさぼるように読んだことがうかがえる。奔放な構想力でつくりあげられる奇想天外なドラマの世界に津田はのめりこんでいた。

4. 仏教と儒教に関して

津田家の精神生活に関して、仏教に関しての記事が興味深い。

「父は仏教に対しては冷淡であつたらしい。」「毎朝きまって仏壇の前で礼拝をしたが、それについて父は、おれは御先祖さまにおまゐりをするのだ、ほとけさまを拝むのではない、おれはお念仏などは唱へないよ、と母にしばしばいつてゐたそうである。(家の宗旨は浄土宗であつた。)」(p.29)

「ナゴヤは、概していふと、仏教の信仰の厚いところらしく見えるのに、そこで育った父が、どうしてかういふ考をもつようになったかは知らぬが…」(p.30)

「わたしは、(おばあさんが亡くなって)毎朝、学校のゆきがけに、まはりみちをしてそのお墓におまゐりをした。」(p.67)

このように父・藤馬は、法事等の儀式は別として、仏教に対して無関心で、基本的に仏教信仰とは無縁の家庭であった。

しかしながら、中学校以降の津田の動向をみると、「偶然のことながら」³⁰、明治22年、名古屋で南条文雄が校長をしていた東本願寺別院の私立中学校(大谷派普通学校・現在の名古屋大谷高等学校)に入学する³¹。のち、明治26年(1893)夏、沢柳政太郎が京都東本願寺の招聘に応じて京都の教校に赴いたのに同行したり、富山県にある東本願寺別院付属の高岡教校の教授に就く³²など、個人的には仏教の世界に深い関係を結んでいた。

その一方で後年津田は、客観的視点から研究を進めていたと思われる。「仏教革新の第一着手と古代印度の研究」で仏教の近代化には古代インドの歴史研究が必要であるといい³³、「仏教史家に一言す」では、「今の仏教史家と称するものが、故意の偏私をその間に挟まんとする傾向あるは、ここに断言を憚らざる所なりとす。」³⁴などと、その研究姿勢に対し批判を加えているなど、仏教に大きな関心を示している。

前述したように森達から、また父からも儒教の漢籍類の指導を受けた。しかしその体験の津田の感想は、

「儒教の本も読み講釈も少しは聞いたが、本に書いてある文字の意義を知ることがいくらかできたのみで、儒教の教といふものは何もわからなかったらしい。ヤマザキ学派の習ひであるから、日常の行ひについての工夫のしかたといふやうなことも話されたに違ひなく、その時にはそのことの意味だけはわかったかと思ふが、工夫そのことは、しもせず、できもしなかったらう。」(p.44)

であった。

「中学時代に友人たちと同人雑誌を作ったことがあるが、その時に「漢学の必要を論ず」といふことを書いたおぼえがある。これがわたくしの文章が活字になったそもそののはじめであるが、しかし実をいふと、小学校を卒業してからは、却って漢文の書物はあまり読まないやうになってゐた。」

「漢字をいくらか知り、漢文を少しでも読んでゐたことが、後に日本の古典をよむやうになった時、大きな助けにはなった。」(「明治十年代の田舎の小学校」前掲、p.81, p.82)

明治初年、士族の家庭に生まれた子どもとして、左右吉に対して基本的な儒学の知識と素養を得るための指導が行われた。

近世の村役人や豪農層の学問に関する研究は最近深められており、例えば尾張藩の海西郡の庄屋をつとめた服部家の記録から当時の子どもの儒学学習の様子を知ることができる³⁵。8歳から13歳までの間(文政年間)に子どもは「論語」「大学」「孝経」「孟子古義」など漢籍を繰り返し読んでいた。当時の社会の身分にふさわしい水準を保持するため、ひととおりの文化教養は必要なものであった。

津田と儒教との関係を示す資料として、森達の指導によると見られる文明小学校卒業の頃の6冊の筆写本(早稲田大学図書館所蔵)があり³⁶、これに関し、早川、土田両氏が言及している³⁷。筆写本の内容は次の通りである。

◇「諸生規矩階級」

[巻末に「明治十九年八月上旬 津田左右吉寫」と記載](布施維安・著)朱子学、山崎闇斎の事項説明が掲載。森好齋は闇斎学派の蟹養齋(布施維安)の系譜につらなる。

◇「読書路徑」

〔卷末に「明治丙戌八月 津田左右吉寫之」と記載〕
〔布施維安・著〕朱子学関連図書の目録解説的な内容。

◇「孝經句解」

〔卷末に「明治十九年六月 写之 津田左右吉 / 明治十有九歲丙戌夏六月晦日 津田氏」と記載〕〔布施維安・著〕朱子学の写本を筆写。

◇「正學正傳」

〔卷末に「明治丙戌七月上旬 津田氏」と記載〕〔上月信勝・著〕朱子学の研究者、業績、著作をまとめたもの。山崎闇齋の事項説明が掲載。

◇「道統図説」

〔卷末に「明治十有九年七月朔日 津田左右吉 / 明治〇〇九年七月朔日 津田氏 〇書」と記載〕孔子以来の儒学者系図、生没年。山崎闇齋の事項説明が掲載。

◇「語録解義」

〔卷末に「明治十九歲次丙戌 津田左右吉寫」と記載〕朱子語録（原典でなく、読解テキスト）のうちの、単語を辞書的に掲載したもの。

筆写したこれらの書物に関し、津田はのちに次のように特別に一項を設けコメントを残している。

「諸生規矩階級一冊、読書路徑一冊。これはわたくしが子どもの時に写しておいた本である。明治十九年に写したと書きそへてあるから、考へてみると、小学校を卒業した十四の時のことらしい。かういふものを写したことすら、殆ど忘れてゐたが、六七年まへに、むかし読んだ四書や五經の素読本のつかさねである中から、ふと見つけたしたので、何とはなしに手づかのところへもって来ておいた。」「養齋の著述では、なほ、「孝經句解」といふものを、上記の二書と同じやうにして、わたくしは写してゐるが、これは漢文で書いてある。…」「わたくしは小学校時代に、森先生から小学と家禮の講釈をきいた。近思録をきくまでにはならなかったと思ふから「諸生階級」の新学の段階で止まってしまったのである。さうして聴いた講釈もみんな忘れてしまひ、おぼえてゐるのは小学の「應對」をヨウタイと読むことくらいである。」（「諸生規矩階級、読書路徑」前掲、p.387～p.391）

このように、津田は、筆写した書物の内容やのちの研究への直接的影響については言及していないものの、この筆写は津田にとっては漢文に関する

基本的素養を得、朱子学全体のイメージをつかむ貴重な体験であつたと思われる。

津田はのち儒教に対し研究を深めていくが、幼少体験に触れつつ、

「孝經を読むに其の含蓄せる概念は頗る明白ならず、且つ一貫せざるが如きを覚ゆ、…」「われ孝經といふもの通読せしははじめてなり、山崎派にて好んで用ゐざりしにやあらん、幼時は素読も習はざりき」（「日記」明治33年8月11日条、『全集』第26巻、p.93～p.95）

と記し、さらに

「儒教が人情の自然にとほきところあるは否むべからず」「儒教の所謂「学道」は畢竟無意味にして、その道もまた遂に根柢なきもの…」（「日記」明治36年7月9日条、『全集』第26巻、p.352～p.353）

と、儒教の形式主義に対して批判的態度を表している³⁸。

5. 課題

「はじめに」でも記したように、「子どもの時のおもひで」は実際の体験からかなりの年月が経過して執筆された「回想文」である。従つてその記述は當時を振り返りつつも、その後のさまざまな経験や研究生活を経た上のものである。晩年の自己を意識した表現になっている部分があることは否めない。

津田は、青年時代を中心に書いた日記、日信、著述にも幼少期の出来事について触れている部分があり、今回、断片的にその一部を紹介した。日記は、個々の事象において「子どもの時のおもひで」と比べるとより実体験に近い時代でのものであり、率直な思いが吐露されている。今後はそこでの記述や表現を精査し、「子どもの時のおもひで」の回想内容との相違や矛盾点の比較検証を行うことによって、津田の思想形成の過程を捉えていくことが必要であろう。

【注】

- 1 のち、『津田左右吉全集』（以後、『全集』と略す。）第24巻『自叙伝他』岩波書店、1965年に収録。
- 2 これは題名のなかった「遺稿」であり、1965年、『全集』24巻に収録される際に便宜上付けられた表題であ

- る。
- 3 津田の実像や研究姿勢を究明した試みとして、家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店、1972 年）があり、「幼少期の原体験」として記述「尾張藩の佐幕派の家中で成長した事実は、歴史意識形成の出発点をなす原体験」「幼少期以来の孤高の生き方が津田の学問の強さ弱さの原点」がある。
 - また、瀬上瑛は、津田について「彼の思想の底流に父祖からおのずと受け継いだ美濃の国学の精神があったと解釈しても、あながち的はずれとはいえない。」としている（瀬上「津田左右吉」『東洋学の系譜』大修館書店、1992 年、p.166）。
 - なお、木村時夫は「歴史の見方とその叙述について—津田博士の子どもの時のおもひで—を中心に—」（早稲田大学社会科学部学会『早稲田大学人文自然科学研究 11』1974 年、p.29～p.48）を著している。
 - 4 瀬上は、「父が勤務し、彼が就学した地元の小学校が文明開化の教育を指向していたことは校名が如実に示している」としている（瀬上、前掲、p.166）。
 - 5 尾関公見「津田先生のご両親」『全集第 24 巻』付録、1965 年。横山良彦「文明義校と教師」『津田左右吉と美濃加茂』津田左右吉博士顕彰会、2011 年。
 - 6 家永、前掲、1972 年。
 - 7 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」『『没後 50 年津田左右吉展』展示図録』（以後『図録』と略す。）早稲田大学、美濃加茂市民ミュージアム、2011 年、p.34。
 - 8 可児恵子「下米田小学校教育史料」『岐阜県史料調査報告書』第 18 集、岐阜県歴史資料館、1997 年。
 - 9 明治 5 年秋、細野忠陳から「達」の名の由来について触れている記事がある（『名古屋叢書第 22 巻・感興漫筆・下の二』p.300）。
 - 10 「尾関公見・津田左右吉の対談記録（昭和 32 年 10 月 19 日）」『胸像建立記念誌・津田左右吉博士』津田左右吉顕彰会、1992 年、p.71。
 - 11 前掲『図録』、p.29。
 - 12 現在の名古屋市東区と推定される。津田の母・勢以と同郷。
 - 13 今尾藩は尾張藩の「御付家老」で家康から二万石、尾張藩から一万石を知行され、他の家老職とは一段高い地位にあった。明治維新とともに尾張藩より独立したが、廃藩置県により今尾県と改称、間もなく岐阜県に統合された（『美濃加茂市史・通史編』1980 年など）。
 - 14 則光尋常小学校「卒業姓名簿」（前掲「下米田小学校教育史料」）。
 - 15 下米田尋常高等小学校「明治六年起・沿革誌」（前掲「下米田小学校教育史料」）に「訓導 森達」「助教 津田 藤馬」の名が見え、母・せいも明治 16 年から 19 年まで「雇」として勤務していたことがわかる。『図録』p.3 写真参照。
 - 16 なお、蜂屋には津田家の親戚があり、よく遊びに行ったようである。献上蜂屋柿の柿庄屋・日江井家である。「それはハチヤのうちのカセダ（加瀬田）といふところにある家であった。前に書いたナゴヤのツダのむすめでわたしの従姉にあたるものが、そこに嫁いでゐて、わたしと同じとしの子どもがあった。…柿庄屋といふものがおいてあった、その庄屋をつとめてゐた家ださうである。」（p.27）。
 - 17 『美濃加茂市史・通史編』1980 年、p.938。
 - 18 明治 17 年の「岐阜県旧大垣藩士族就業状況」では、官吏 11.9%、教員 4.1%等となっている（濱名篤「明治初期階層構造の研究—『士族』の場合—」（『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会、1995 年、p.93）による。）。
 - 19 「明治 22 年度制定字枋ヶ洞溜池規定書」（美濃加茂市信友区有文書・美濃加茂市民ミュージアム寄託）などによる。
 - 20 下米田小学校の賞録簿によると、村の教育のために藤馬が寄付をしていることもわかる（尾関公見「津田先生のご両親」、前掲、1965 年）。
 - 21 「自分の家では江戸時代の武士の家の教育みたいなものは別に教えられていなかった、と言っておられますが、事実そういう空気の中で育った先生の書いたものや論文を読みますと、不思議に思われるほど新しい近代的な調子、考え方が見えています。」（栗田直躬『中国思想における自然と人間』岩波書店、1996 年、p.344）
 - 22 家永、前掲、1972 年。
 - 23 津田の読書の仕方に関しては、原随園「津田博士の読書」『全集』第 2 巻、1963 年、附録所収）にも記述がある。
 - 24 拙稿「「子どもの時のおもひで」からみる津田少年期の読書体験について」『津田左右吉と美濃加茂』津田

左右吉顕彰会、2011 年。

- 25 津田が直接読んだと思われる『日本外史』が早稲田大学図書館収蔵資料中にある。「岐阜県美濃国加茂郡東栃井村士族・津田藤馬長男・天満神社氏子 津田左右吉・明治六癸酉十月三日生」とメモあり。前掲『図録』p.4 写真参照。
- 26 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」、前掲『図録』、p.36。
- 27 李建花「津田思想史学の方法論」『社会文化形成第3号』社会文化形成研究会、2011 年 所収。
- 28 また、榊原芳野の編纂した歴史書『太古史略』についての津田は「皇室のことや、後にやかましくいはれるようになった國體といふやうなことに、教へられたり注ぎ込まれたりしたことは、何も無かったにちがひない。」(p.41)と感想を述べており、興味深い。
- 29 鈴木瑞枝氏は『絵本小栗一代記』『水戸黄門仁徳録』の2冊を津田から譲り受けた。前者は、のち美濃加茂市民ミュージアムに寄贈された(鈴木瑞枝『黄昏の人』八雲書房、1994 年、p.62)。『図録』p.4 写真参照。
- 30 「僕にとっては偶然のことながら、西本願寺の別院の発起で、一種の私立中学のやうなものが名古屋に建つことになり…」(「子どもの時のおもひで」以後、p.103)。
- 31 尾張高等学校『155 年のあゆみ』1982 年頃。
- 32 「子どもの時のおもひで」以後、p.104。
- 33 「経歴の上では比較的ふかい関係を結んでいたのに、主体的には仏教信仰と根本からして無縁なのであった。」(大室幹雄『アジアンタム頌』新曜社、1983、p.119)。
- 34 『密厳教法』166、1896 年(今井修編『津田左右吉歴史論集』岩波書店、2006 年、p.37～p.38)。
- 35 松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成」『尾張藩社会の総合研究・第三篇』清文堂出版、2007 年。
- 36 『全集』21 巻付録写真及び前掲『図録』p.4 写真参照。
- 37 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」、前掲『図録』、p.36、土田健次郎「語録解義 解説」、前掲『図録』、p.20。
- 38 大室幹雄は、津田の国家主義的儒教道徳に対する批判に関し論じている(大室、前掲、p.82)。

(かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム学芸専門監)

「身近な自然についての不思議」を「展示」する

2011 年度「おどろき はっけん みのかもの自然展」を振り返る

西 尾 円

1. はじめに

美濃加茂市民ミュージアム（以下、市民ミュージアム）では、2011 年 7 月 16 日から 9 月 4 日までの 42 日間、「おどろき はっけん みのかもの自然展」（以下、「みのかもの自然展」と略す）を開催した。「みのかもの自然展」は文字通り、「みのかもの自然」をテーマに、「主として」子どもを対象とした。子どもたちが日常生活の中で触れる自然、身の回りにある自然などについて、面白いな、何故かなと感じている不思議や疑問等をもとにして、展示を構成することとした。また、その内容によっては子どもたちと一緒に調査を行い、その結果を紹介することとした。ただし、一つの質問に対する「答え」そのものを示す「Q & A」のような展示とはしないようにしようと考えた。子どもたちの不思議には、一つの展示をじっくり観察したり、比べて見たり、触って確かめたりすることで、あるいは実際の自然の中、つまり市民ミュージアムを取り囲む森の中や美濃加茂市内外の色々な場所に出かけていって見たり確認したりして、子どもたち自身が「見つける」ことで「答える」ことのできる展示を目指していた。市民

など家族も含めて「家族で自然を楽しんだり、親しんだりする機会、きっかけ」となることも期待していた。

さらに一歩進んで、展示を参考にしながら夏休みの研究をする子どもが現れたらという期待も持っていた。

本稿ではこの「みのかもの自然展」に向けてのアンケートの実施とその結果からの展示構成の作成過程を振り返りながら、「みのかもの自然展」の「新しさ」を明らかにしたいと考える。

2. 市民ミュージアムのこれまでの展覧会と市民の関わり

一般的に、展示とは「個々の資料が内蔵する学術情報を研究することにより導き出し、その成果を伝え教育することにより、それはまた同時に学芸員の研究の成果を世に問う場」¹ という目的を持ち、そのように広く理解されていると言える。その基本にあるのは、「学芸員」による調査研究であった。しかし、近年の各地の博物館の活動を見てみると、「市民」とともに数年間の継続した調査研究や収集活動をおこない、その結果を展覧会として成果発表する、あるいは常設展示として紹介することが増えてきている²。

ところで、市民ミュージアムの自然系の展覧会³では、2006 年に開催した「生きる・くらす鳥とひと展」が、市民の参加を得て開催している。その概要は以下の通りである⁴。

私たちのまわりの“環境”が変わると、生きもののくらしも変わってきます。それは生きものやひとの“いのち”にもかかわることがあります。そこで、みのかもの文化の森では美濃加茂市とその周辺で生きる野鳥たちやそのくらしを紹介しま

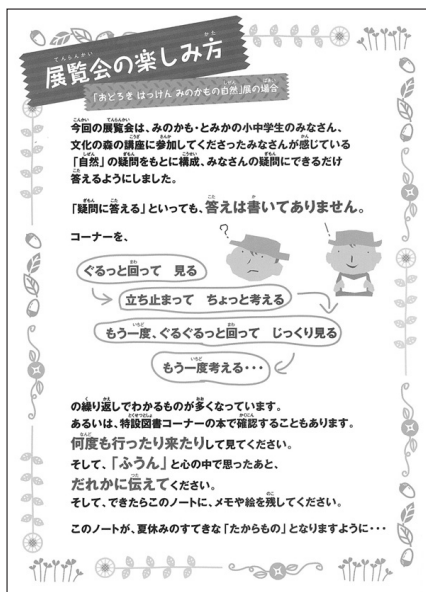


写真1 「はっけんノート」より「楽しみ方」

す。また、市民の方々や市内小学校の協力を得て、美濃加茂で見られるツバメの調査を行いました。この調査結果や野鳥の観察記録をもとに私たちを取り巻く生活環境を考えます。

ここでいう「市内小学生」とは、美濃加茂市内にある9つ全ての小学校児童全員のことである。この時、全児童には「ツバメの調査用紙」を配布し、各学校に1枚ずつ校区の地図パネルを配布した。調査してきた場所に、ツバメの種類ごとに色分けしたシールを貼ってもらう方法をとった。校区地図パネルはそのまま展示に活かした。

このように、展示の一部というかたちで市民の調査・収集結果を紹介する展示は行ってきたが⁵、「展示構成そのものの起源を、市民すなわち子どもの不思議や疑問に置く」ということはこれまでに試みたことのないものであった。また、あわせて独自に美濃加茂の自然の調査を行っている美濃加茂自然史研究会の調査結果を紹介する場としたという思いもあった。

その意味でも、今回の「みのかもの自然展」は市民ミュージアムにとって新しい取り組みであったと言える。

3. アンケート実施の経過等

子どもたちの身の回りにある自然や、暮らしの中で感じている自然現象についての疑問や不思議に思っていることを調べるために、アンケートを次のように実施した。

(あ) 無記名。ただし学校のある地域差や年齢による関心の違いなどを知ることができるよう、学校名と学年は記入してもらう。

(い) 自由記述。複数の疑問を記述することを可能とした。そのため一人で2つ、3つ記述している場合もある。

(う) 小学校は第1学年から第6学年まで、学年悉皆となるように調査対象を考慮した。中学校は教科担任制であるため、理科の担当の先生に授業の中での取り組みを依頼した。

(え) 学校の児童生徒へのアンケート実施・回収については、文化の森活用委員会⁶の先生や理科

研究会の先生に個別に協力をお願いした。

(お) 美濃加茂市内の小中学校と組合立中学校のほか、市民ミュージアムの各種講座、具体的にはフォレストくらぶ⁷やのんびり自然観察会⁸、美濃加茂市立中央図書館などでもアンケートの協力を依頼し実施した。

アンケートの実施の前に、まず学習係が発行している「森の学校だより」⁹の2010年度の1月号の紙面上で「自然についての疑問を募集しています」と題して、アンケートの実施を告知した(資料1)。その後、2月に開催された校長会や文化の森活用委員会の中で正式にアンケートへの協力を依頼した。小学校については文化の森の活用委員会の委員の先生が所属する学年での実施、中学校については1年生あるいは2年生に、理科の時間に実施をしていただくようお願いをした。小学校は活用委員会の委員の先生の学年だけでは1学年から6学年までのすべての学年を網羅することができなかったため、別に協力をお願いした学年もあった。また中学3年生は、アンケートの実施が3学期であったため、受験に配慮し、このアンケートへの協力は依頼しなかった。

市民ミュージアムの講座で協力を依頼した経過は次のようであった。

2010年12月19日に、のんびり自然観察会で参加者にアンケートへの協力を依頼したが、「自然についてというのは、急には難しい」とのことであった。だが、参加者の一人から「カエルのうんちはどんな形？」との質問がでて、「そう言えばどんな形だろう」と他の参加者との話題になった。このような疑問でも良いとの話をして、後日1枚回収した。

2011年1月6日には、フォレストくらぶでアンケートを実施し、その場で15枚回収した。

美濃加茂市中央図書館での来館者にも協力いただいた。図書館とは、当初「みのかもの自然展」開催期間中に関連図書の特設コーナーの設置という方法で、連携を行う予定でいた。しかし「みのかもの自然展」に向けての取り組みを前もって知ってもらうことも、展覧会の知名度を上げるこ

とになるのではないかと考えたこと、そして子どもから大人まで幅広い年代が利用する図書館の利用者からも、自然についての疑問を提示してもらいたいと考えたため、アンケートの実施を依頼した。図書館では2011年3月23日から4月7日までの12日間、児童書コーナーの一角にある机にアンケート箱を設置して協力していただいた。回答してくださったのは、記述してある年齢から幼児、小学生、中学生と思われる。この間、7枚のアンケート用紙が箱に投入された。

学校に依頼したアンケートの回収日は、2011年3月6日とし、文化の森活用委員会の先生方に回収、文化の森への返送をお願いした。文化の森活用委員会が設けられた当日の夕方、学校から回収されたアンケートが手元に届いた。1時間ほど前にアンケートへの協力を依頼したばかりであったのに……と不思議に思っていたら、1月に配布した「森の学校だより」を見て、面白い取り組みだからと職員会で話題となったようである。その先生の学年が学校代表としてアンケートに協力しようということになり、わざわざ人数分を印刷し、児童に投げかけをしてくださったとのことである。先生方のお気持ちを大変うれしく感じた。またこのようにとらえてくださったことは、やはり「日常的に文化の森を授業の一環で活用する」という、これまでの積み重ねで築かれてきた関係があったからであると考えられる。最終的に、回収した用紙は487枚、アンケートに書かれた不思議は1161項目にまでのぼった（類似の記述も1項目としてカウントした）。

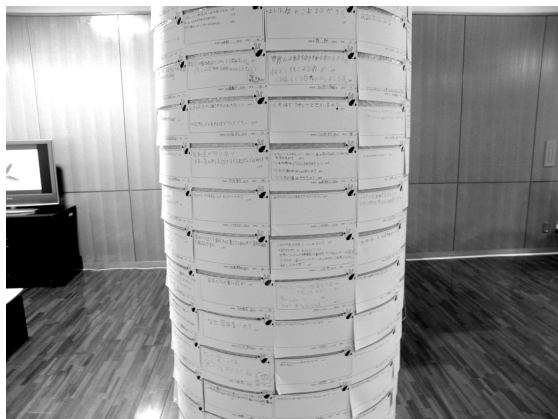


写真2 エントランスに張り出したアンケート用紙の一部

このアンケートを実施してから、「みのかもの自然展」まで約半年のブランクがあることになる。そこで、子どもたちからのアンケートの結果がどのように展示に反映されていくのか、という途中経過を「森の学校だより」で紹介することとした。



写真3 森の学校だより4月号より 該当箇所

「みのかもの自然展」に意識を向けてもらえるようにという気持ちもあった。2011年度4月号では、集まってきたアンケートにどのような内容が書かれていたのかということを紹介した。

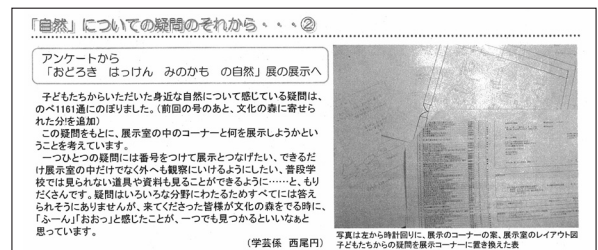


写真4 森の学校だより5月号より 該当箇所

5月号では、アンケートをまとめた表や展示コーナーの案などを描いた絵を載せた写真を使用した。大きくないため鮮明でなかったと反省している。

4. アンケートの結果と展示構成の構築

(1) アンケートの集計（資料2）

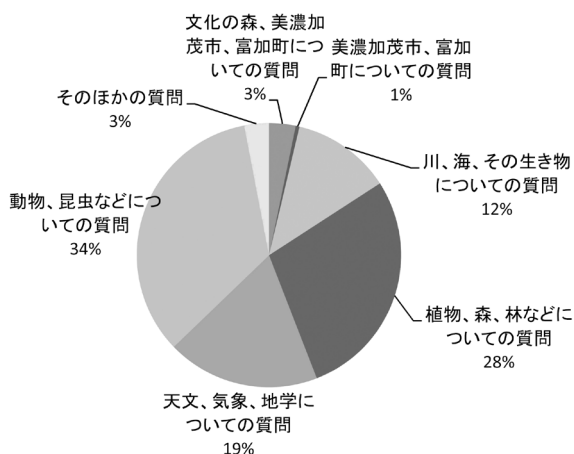
1161項目にものぼる自然についての不思議は、その内容によりまず分野ごとに分類することから始めた。その分類と構成比は以下のとおりである。

- (a) 文化の森の周囲の自然、その他文化の森のことについての質問
- (b) 美濃加茂市や富加町などの自然についての質問
- (c) 川、海、その中の生き物についての質問
- (d) 森や林、木など植物についての質問
- (e) 天文、気象、地学についての質問

(f) 動物、昆虫などについての質問

(g) 以上の (a) から (f) までは分けられない、その他の質問

このグラフからも分かるように、「(d) 森や林、木など植物についての質問」と「(f) 動物、昆虫などについての質問」がそれぞれ約 3 割と大きな割合を示している。具体的な事項を見ると、「なぜ雑草が生えてくるの」や「なぜ花はかれるのか」「葉っぱはどうして緑色なの」「山はどうやってできるの」といったものや、「絶滅しそうな生き物はなに」「虫の種類はどのくらいいるの」「鳥はどうして飛べるの」といったものがあつた。次に、「(e) 天文、気象、地学についての質問」が約 2 割を占めている。特に、天気について（「なぜ雪は降るのか」「雲はどのようにしてできるのか」「風はどこから吹いてくるのか」など）の疑問が多く寄せられた。このアンケートを依頼するところにニュージーランドで大地震が起きている。そのため「地震はなぜ起こるのか」といった質問も寄せられたと考えられるが、子どもたちは地球規模で起きている自然現象にも関心を持っているということが読み取れる。



グラフ 1 不思議の構成比

ところで、子どもたちに身近な自然物だと考えたダンゴムシ等を例として、「ダンゴムシの足は何本あるの」と「サクラはどうしてまちがえずに春になるとさくの」という質問をアンケートの依頼用紙に例として挙げた。そのため、これに類似する質問も多く寄せられてしまったことは、例の

出し方が良くなかったと反省すべき点であつた。「ダンゴムシ→足が多い虫→ムカデ」と連想したことが容易に想像できる、「ムカデの足は何本?」、「ムカデは本当に足が百本あるの?」という質問がその例である。アンケートに書かれる質問を結果的に少し制限することになったのではないかと考えられる。

いずれにしても、アンケートからは、子どもたちが毎日の暮らしの中で感じている「本当の意味で身近な自然の不思議」が寄せられていると改めて感じた。

一方で、寄せられた不思議のいくつかには、理科や生活科など学校の授業の中でも「学習する」内容のものがある。「実物」による教育、「体験からの学び」や子どもたちの実際生活と教科の学習の「つながり」の大切さが学習指導要領などにも記されたり¹⁰、教育関係の雑誌等にも特集が組まれたりする。各学校でも、実際体験に向けての教材開発や取り組みがなされ、何よりも、市民ミュージアムを活用した学習の時間もその一部であるはずである。長く言われてきている子どもたちの「教室での学び」と「暮らしの中での経験や体験」、「自分の目や手を使って知ったこと」が結びついていないということ、「なぜそのように考えるのか」と言う考え方の道筋も十分ではないということの表れであると言えるのではないだろうか。市民ミュージアムでの今後の取り組み方法をもう一度振り返る必要があるだろう。

(2) アンケートから展示構成へ 1 (テーマの絞り込み)

質問をまとめていくと、回答した学年や学校の所在地の様子（住宅街にある学校か、木々や林に囲まれた学校か）などには影響を受けていないと考えられる、共通している質問などが多く見られた。例えば、「文化の森にはなんの植物があるの」「木曽川にはめずらしい生き物はいらっしゃるか」「なぜ雑草が生えてくるの」「なんで石はかたいの」「風はどうしてふくの」「昆虫の足はなぜ6本と決まっているの」などである。このように多く寄せられた質問をもとに、大きく次のような展

示のテーマに絞りこんだ。

- ①文化の森の自然について
- ②水に関係することについて
- ③植物に関係することについて
- ④地面、特に大地（地質）に関することについて
- ⑤生き物について

寄せられたアンケートの質問にあったものの中で、テーマとなり得るものでも取り上げなかったものがあるが、それについては後述することとする。

ところで、自然系の展示では当然ではあるが、自然資料を展示するものである。どんな資料を展示しようか、と考えたときに、以前市民ミュージアムで開催した色鮮やかな栗田宏一氏の土の展示会のことを思い出した¹¹。土を描くときに私たちは安易に「茶色」のクレヨンや色鉛筆を使うが、微妙な色合いの違いにより、「土＝茶色」とはいえないことを示しているたいへん美しい作品であった。栗田氏の作品は近年、各地の美術館などで紹介されている。市民ミュージアムでも、美術作品として収蔵している。土はもともと私たちの足下を作る大地を構成しているもの、大地に含まれる岩石や鉱物など、土の「もと」になっているものは地学、すなわち自然の分野のものである。土の色の違いは、中に含まれる鉱物やその割合によって色が少しずつ異なっているのである。そこで、今回は、自然の展示ではあるけれども、あえて自然資料だけでなくこのように美術や民俗、考古、歴史など他分野の収蔵資料や収蔵作品などを展示することができないかということも含めて考えていくことにした。様々な分野を扱う市民ミュージアムとしての強みを活かすこととした。

そして、2000年の開館前から収集してきた各種の自然標本や資料なども、6つ目の展示テーマとして「⑥これまでの収集資料など」としてとり挙げることにし、以上6つに絞り込んだ。

（3）アンケートから展示構成へ2（テーマの細分化）

（2）で設定した①から⑥の展示テーマについて、アンケートの質問からさらに細分化した内容

を考えていくことにした。

「①文化の森の自然について」では、文化の森で見られる動物や植物を紹介することを考えた。しかし、敷地内の動植物についてすべてを網羅するような調査は行っていない。また過去に動植物のマップなども作成したことはなく、唯一鳥についての美濃加茂自然史研究会による調査結果があるのみであった。そこで昨年から少しずつ取り組んでいた「森の道草」のことを思い出した。森の中に生えていてよく見かける草花、特に目立つような花ではなく、雑草と言われている植物や、その時々見かけた生き物などをデジタルカメラで撮影したものをポストカードにプリントし、市民ミュージアムの「情報コーナー」で紹介していた。同じように、4月から7月にかけての動植物を紹介できないだろうか、ただし一人で調べていては同じ視点となってしまうので、他の人と一緒に行ってみたいと考え、フォレストくらぶやのんびり自然観察会での実施を計画した。



写真5 「森の道草」ポストカード

また、動物については、市民ミュージアムの森の中で見られる鳥については、季節ごとの活動が分かっている。それは「季節と生き物」で、その他市民ミュージアムのとなりの池にすることなどが分かっているものなどについては、「文化の森のとなりの池」として「③水に関することについて」のコーナー内で紹介することを考えた。ただし、他のコーナーとの重複がこれ以外の内容についてもいくつかあり、見に来てくださった方には分かりにくいかもしれないという心配は当初からしていた。

昆虫類については、夏休みに開催する「子ども講座」を設けて、夜の文化の森にいる生き物を調査するという目的での開催とすることとした。

以上「①文化の森の自然について」は、「森の道草」「文化の森の周りで見られる鳥」（「季節と生き物」と重複）、「夜の森にいる生き物」とすることとした。

次に「②水に関係することについて」では、美濃加茂市を流れる川とため池にいる生き物を主として取り上げることとした。美濃加茂市の南を流れる木曽川と、市内を流れる川浦川にはともに国指定、そして市指定の天然記念物が生息している。「絶滅しそうな生き物は何ですか」や「木曽川にはどんな生き物がありますか」といった質問につなげていくことができるのではないかと考えた。そして、「文化の森のとなりにある池には何がいるの」という疑問には、美濃加茂自然史研究会が行ってきた太郎洞池の調査結果、そして美濃加茂市内の他のため池の調査結果とあわせて展示することとした。後に触れるように、この太郎洞池は、小学校第4学年の社会科副読本にも教材として取り上げられている。歴史的にも意味のあるため池を、社会科と理科という2つの側面から見るができるようにしたかった。また普段は川や池で生き物を捕まえることはできないが、今回は調査ということで、この太郎洞池が水抜きをして外来種生物をいったん排除した後の生態系を知るために、調査として行うこととした。

以上、「②水に関係することについて」は、「木曽川にいる生き物」「川浦川にいる生き物」「文化の森のとなりの池」「美濃加茂市内を流れる川の源流と清水」「みのかもの自然なう 水コース 太郎洞池の調査結果」そして「美濃加茂自然史研究会のため池調査結果」とした。

「③植物に関係することについて」は、類似した質問が寄せられていることが大きな特徴であった。「植物は何種類あるのか」（草花、木について問う）「雑草や草はなぜどんどん生えてくるのか」「季節がくると花が咲いたり、葉の色が変わったりするのはなぜか」「木はどのくらいかけて大き



写真6 太郎洞池に関する道具

くなるのか、寿命はどのくらいか」「森と林、山はどのようにして出来、その違いはどんなところか」、と言ったものである。

「雑草や草はなぜどんどん生えてくるのか」という疑問は、「抜いても抜いても」や「タネもまいていないのに」という言葉からも、子どもたち自身、あるいは日常の「草取り」をする家族の姿といった経験に基づいていると考えられる。また理科や生活科で学ぶように「タネをまく」という行為がすべての始まりであり、花が咲くことにつながっていると考えているとも読み取れる。「草のなぜ」を一つのテーマとして、「タネをまく」「大きくなる」「時々枯れたりしてだめになる」「また別のタネが芽を出し大きくなる」「花が咲く」「タネができる」「次に向けてタネを広げる」といった草花の一生やそれに関わるタネの工夫などを紹介することにした。ただ紹介するだけでなく、「すごろく」として遊びながら知ることのできるようにした。「すごろく」ではひつつきむしとして子どもたちによく知られている「オオオナモミ」がタネから芽を出し、花が咲き次のタネができるまでをとりあげた。タネを広げる工夫としては、大人から子どもまでよく知っている通称「ひつつきむし」のアレチヌスビトハギなどもあわせて紹介をしたいと考えた。ここで、ひつつきむしに着目したのは、それが世代を超えて親しまれていることと、昨年度の「のんびり自然観察会」で作った「ひつつきむしのひ・み・つ」という標本を活かしたいと考えたからである。

「木はどのくらい生きるのか」については、図

鑑などで調べることで、世界各地の長生きの木を知ることができる。そこで、今回は美濃加茂市内で長く生きている木、そのほとんどが天然記念物として指定とされているが、その木々を紹介することとした。また、「木の一生」については「草のなぜ」と重複する展示内容となる可能性があり、文化の森の周囲の森の様子の変化を航空写真による比較、アベマキのドングリの発芽の過程標本の展示などの方法とした。

また、現在の文化の森の草や木の様子をじっくり調べるために、4月から7月にかけて「みのかもの自然なう」という各3回の調査を行う講座を設けた。タンポポの分布を調べるコースとドングリのツブラジイを調べるコースと2つのコースで行った。タンポポコースでは、タンポポマップを作成、ツブラジイでは花と実の様子を観察し、今年と去年の実がついた枝を採集し展示したが、調査報告などは市民ミュージアムで準備してしまった。報告の作成まで参加者と一緒に行いたかったと思う。

以上「③植物に関係することについて」では、「草のなぜ」「タネができたら広げる」「木の不思議」「小学生のタンポポ研究」「太田三郎さんのタネ」「みのかもの自然なう 森コース1 タンポポ調査結果」「みのかもの自然なう 森コース2 ツブラジイ調査結果」とした。

そして、「④地面、特に大地（地質）に関するについて」では、栗田宏一氏の土の作品のほか、美濃加茂自然史研究会メンバーに依頼し、常設展示室内の地学コーナーにある岩石の標本の充実を行った。また展示室には普段置かない展示パネルを設置することで、常設展示にも目を向けてもらうようにした。

「⑤生き物について」では、虫、鳥のことを紹介する「虫のなぜ」と「鳥のなぜ」、「季節と生き物」、「絶滅しそうな生き物」に的を絞ることとした。「虫のなぜ」では、食べられる虫の紹介と、昆虫と昆虫以外の虫についてその違いや種類を紹介する予定でいた。食べられる虫は、昔からこの地域から東濃地方にかけて食べられていたヘボ（蜂の子）やイナゴなどの瓶詰めにした実物や、「みのかも

文化の森ボランティア 伝承料理の会」の講座での様子などもあわせて紹介しようと考えた。「鳥のなぜ」は、鳥の体のことや羽のこと、飛び方なども紹介したいと考えた。また同じ種類の鳥の骨格標本と羽毛が生えた標本を比べてみるができるようにすることとした。「絶滅しそうな生き物」は、美濃加茂市のレッドデータブックに載っている動物と植物を中心に、美濃加茂自然史研究会がこれまで行ってきた調査の中で撮影してきた写真をパネルで紹介、鳥については、「ほぼ実物大パネル」としようと考えていた。「季節と生き物」では、季節により変化する生き物、特に動物などの姿や種類を紹介することを考えた。一つは、小学校3年生の理科の教材となるモンシロチョウ（春型と夏型）、もう一つは文化の森周辺で見られる鳥の種類の変化、さらに文化の森の植物の芽吹きの様子を撮影した写真などを用いようと考えていた。

「⑥これまでの収集資料など」は、美濃加茂市内で採集されたものをはじめ、他市町村、他県での標本も含め、収集標本、資料を一つの展示室内で展示することとした。「同じような姿をした生き物が並ぶ姿」「とにかくたくさん細かいものが整然と並んでいる、集められている」姿を見てもらいたいと考えた。収集した資料は標本として収集したものもあれば、デジタルデータとして収集されているものもある。デジタルデータは、「絶滅しそうな生き物」でも利用するが、ここでは、鳥のデジタルデータを用いることとした。当初は写



写真7 標本としては失敗の例 色が変わったり、葉が折れ曲がったりしてしまった

真パネルの形にする予定であったが、「ほぼ実物大のパネル」の形にし、また自立するようにして、展示室内の各所に配置、あえてきっちり並べたりしないようにしてみたかった。そして、展示室に並んでいる標本がどのようにできるのか、「標本ができるまで」の手順も示しつつ、実際に作った標本や失敗した例も見せながら展示することとした。

なお、一つひとつの疑問・不思議については番号をつけ、エントランスホールで子どもたちが書いてくれたアンケートのコピーを掲示し、展示してあるコーナーにも番号を示し関連が目で見えるようにした。

（４）アンケートから展示構成へ３（他分野資料の検討と「動き」の設定）

・他分野資料の検討

自然分野以外の美術、民俗、歴史、考古すべての分野の収蔵作品・資料を自然の展示と関連づけて展示しようと考えたことはすでに述べた。事前に、それぞれの担当学芸員と相談し、どのようなものを展示できそうか、主旨にあう資料を相談して決めた。

「③植物に関係することについて」の「草のなぜ」「木の不思議」のところでは、太田三郎氏の「SEED PROJECT from MINOKAMO」から 10 点と、篠原猛史氏の「CONVERTEER BAARHEID VAN PLAATS EN KWANTITEIT-N° 3-07」を展示することとした。ともに植物が増えていく「タネ」そのものやそれをイメージさせる作品である。

太田氏の作品は、植物のタネを集めて和紙で閉じ込め切手のかたちにした作品である。この作品は 2002 年に太田氏自身が市民ミュージアムに滞在しながら周囲の森の中で収集したタネを用いている。作品はタネを一粒一粒ばらばらに分けられているため、タネがついている元の姿の植物標本も展示することとした。私たちの目に映る植物の様子がどのようなものかということが見られるようにした。

篠原氏の作品は植物のタネから根や芽が出たような姿を白と黒で彩った作品である。アベマキの

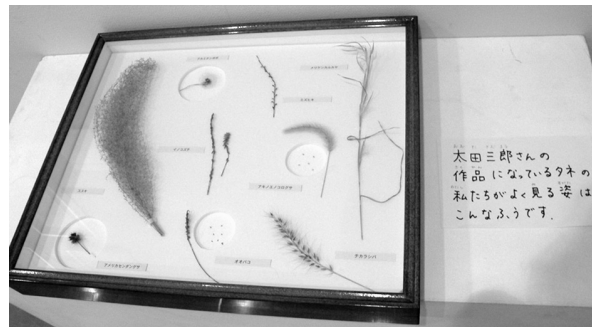


写真 8 太田さんの作品に登場するタネの普段みる植物の姿標本

成長の様子を段階を追って示したパネル標本の近くに展示し、関連を持たせることとした。

「④地面、特に大地（地質）に関するについて」では、栗田宏一氏の「SOIL LIBRARY [GIFU]」の作品を展示した。作品を一瞥するだけで、土には様々な色があることが分かる。

「②水に関係することについて」の「文化の森のとなりの池」では、歴史と民俗の分野との関連づけを行った。太郎洞池の江戸時代の絵図とともに、池の改修工事に使用されたとされる民具 3 点を展示することを考えた。民具は小学校 4 年生の学習時にも触ったり見たりすることはできるが、絵図は美濃加茂市の社会科副読本『わたしたちのまち 美濃加茂』に掲載されているだけであり、実物を見ることはまずない。

また、同時期に市民ミュージアムで開催される予定の「蚕とまゆ展」と、「⑤生き物について」の「虫のなぜ」とを関連づけ、「カイコ」についての質問に答えるようにしたいと考えた。「③植物に関係することについて」でヒマワリについての質問もあり、これは「蚕とまゆ展」を開催する生活体験館（まゆの家）の縁側に鉢植えで育ててもらふこととした。これらは関連する内容であり、「みのかもの自然展」の会場とは別の会場として展示することを考えた。

考古の分野については、遺跡の上に立っているという市民ミュージアムの立地と建設前のトレンチ調査をもとに、土の色が層になって見えるところを一カ所整備し、「④地面、特に大地（地質）に関するについて」のみのかもの大地と結びつけようと考えた。

ところで、昨年開催した「水辺の時間 内山りゅ

う写真展」の時に展示した内山りゅう氏の2点の写真も、みのかもの自然の様子を代表する写真として候補とした。その被写体が川や川の生き物であることから「②水に関係することについて」と関連があるとして展示することとした。

・「動き」の設定

「みのかもの自然展」では、展示室の中だけで展示を楽しむことが終わらないように、外へ出かけていくことや、見るだけでなく手を動かしたりする「仕掛け」すなわち「動き」を取り入れるこ



写真9 森と市内の2種類のマップ

「はっけんノート」は全部で8種類+1枚あった。「展示を楽しみながらみてまわり、このシートを集めて、展示と関連するもののある場所へ出

かける」ことで、外へ出て行く仕組みとなっている。特に「森の中マップ」と「美濃加茂市マップ」では、展示と関わる内容を地図上に示して、出かけるときのヒントとしている。

市民ミュージアムの展示室より外の森への「仕掛け」としては、「③植物に関係することについて」では、「タネプランター」と「シードバンクコーナー」、「ひつつきむしエリア」、「ヒマワリとアサガオの鉢植え」などがあった。「タネプランター」は、7月15日の展覧会前日の内覧会の時に、来場者にタネまきをしてもらった「チンゲンサイのプランター」のことである。会期中に正面玄関脇で育てて、その成長を会期中に観察するものであった。これは「タネをまく」、すると「芽が出て大きくなる」そして「またタネをつける」という一連の流れを示すものであった。一方「シードバンクコーナー」は、土の中に含まれている（蓄えられている）タネの発芽を期待するものであった。市内5カ所（川原の土、文化の森の遺跡の土、文化の森の赤土、家のたくさんある場所の土、山に囲まれた場所の土）の土をカップに入れて、様子を観察するものであった。この2つは文化の森のホームページにある「森の日記」でその様子を紹介した。さらに、「長生きの木」として、展示室では市内にある岐阜県指定や美濃加茂市指定の天然記念物の木の写真や大きさを紹介し、それを見に行けるようマップに位置を示している。森の中マップではドングリやひつつきむしの見られる位置を示し、秋や春にも見られる生き物の情報もごくわずかであるが載せている。展覧会終了後



写真10 タネのミニ標本箱

の利用も少し期待した。

「④地面、特に大地（地質）に関することについて」は、常設展示室も企画展の別会場のよう
に活用することを考えた。美濃加茂自然史研究会の協力により、地学コーナーの岩石を入れている引き出しの中の資料を整理、追加して、今までよりも多くの種類の岩石を見ることができるようにした。また、市民ミュージアムだけでは限られた資料しかないので、カニサイの足跡化石の実物のある岐阜県博物館など、近隣の博物館への案内も行った。多くの子どもたちが博物館に出かける機会となることを期待した。

展示室内で子どもたちが自分の手を動かして見ることができるよう、次のような工夫を行った。「草のなぜ」では、タネについての導入として、ミニ標本箱の表に身近な果物などを含む植物写真を、ふたを開けると中のタネが見られるようにした。

「虫のなぜ」では、ムカデやダンゴムシなどをプラスチック封入標本や乾燥標本とし、その足の数を自分で数えることができるようにした。



写真 11 ムカデとダンゴムシの標本

「鳥の不思議」では、岐阜県博物館から借用してきたトリとサル
の骨の断面を見ることができるようになり、重さをさわって比べたりすること
ができるようにした。鳥がなぜ飛べるのかを示したつもりであった。

また、「みんなで作るタンポポの花」や「チョウを作ろう」、「タネふわり」などの工作も展示室内で、できるだけ関連する展示の近くで行った。「タンポポの花」は、「みのかもの自然 なら タンポポコース」で参加者が作ったタンポ

ポのタネや花のラミネート作品を見ながら、「小さい花がたくさん集まってできているんだね」と話しながら工作をする姿が見られた。

その他「ひつつきむし」のタネやチョウの羽のりん粉、石や砂などを顕微鏡で拡大したり、模型を作ったりできるようなコーナーも設けた。特に顕微鏡は、見ることのできるものを毎週変えてみることも試みた。

「②水に関係することについて」のコーナーでは、長年にわたり川にいる生き物の保護活動や研究を続けている方の「声」も紹介した。なぜ活動や研究を続けているのか、続けることで分かってきたことやうれしかったことなどを、その方々の言葉で書いていただいた。今の時代、早く結果を出すことが求められることが多い。しかし、大変な中でも、続けたり広げたりすることが大切であり、そういうことをしている人たちがみのかもという自然のフィールドでいるということを、子どもたちに知ってもらうことを期待していた。

（５）展示に反映しなかった質問や難しかったこと

1161 項目もの不思議を寄せてもらったが、展示に反映できなかったり、あえて反映しなかったりしたものもある。ここではそれらについて振り返ることとする。

「みのかもの自然展」では、実際に目で見たり、触れたりして分かること、知ることができることを大切に、そのための資料や標本を中心とした展示を目指した。そのため、市民ミュージアム収蔵の資料があるかどうか、という点でまず制約があった。どうしても展示していく上で必要なもので、収蔵していない資料や標本などは、他の博物館からの借用で一部補うこととしたが、すべては補いきれなかったと言える。収蔵資料の大切さを感じた。また実物から「じっくり観る」ことで分かることを重視したので、観察しにくいものや説明的になってしまうもの、図鑑などで調べたりすることで分かるものは省かざるを得なかった。具体的には、「⑤天文、気象、地学についての質問」のうち、天文・気象に関

することについては、扱うことはできなかった。実際に雨が降る様子や風の起きる様子や仕組みなどを説明することは、どうしても説明的になってしまうと考えたためである。さらに「水の循環」についても大切なことであるが、同じ理由で展示しなかった。

極力文字パネルを減らして、標本などを観てもらおうことを考えて、文字を減らしたが、逆に分かりにくくなったのではないかと感じるところが後からでてきたりした。

さらに「草のなぜ」のコーナーのタネを広げる工夫のところでは、ひつつきむしのいろいろな引っつき方やその種類、花の工夫（色とか花びらの形、香りなど）などたくさん取り入れたいことがあったが、中途半端となってしまった。もう少し、ひつつきむしだけに焦点を当てても良かったと感じる。

展覧会と同時進行で育てていた「生きている展示」の「オオオナモミ」、「タネプランター（チンゲンサイ）」、「ヒマワリ」もことごとく虫に食べられたり枯れたりしてしまい、途中で断念した。生きているものを展示して、会期終了を迎えることの難しさを感じた。

5. 美濃加茂自然史研究会と「みのかもの自然展」

この「みのかもの自然展」は美濃加茂自然史研究会の協力を得ていることが大きい。美濃加茂自然史研究会の関わりは大きく3つあった。一つは、展示に係る標本などのうち、市民ミュージアムが所蔵していないが個人としてこれまで収集してきた標本等を提供いただいた。二つ目に、美濃加茂自然史研究会として調査を行ってきた美濃加茂市内のため池の調査結果を報告する展示を行った。研究会は2009年頃から美濃加茂市内のため池の水抜きをする際や外来種駆除を行う際等に立ち会い、その池に生息している生物の種の確認や同定等を行ってきた。その調査結果は個別に集められてきているだけで、各ため池の状況についての報告はどこでも行われていない。そこで今回の「みのかもの自

然展」の中で取り上げることとした。三つ目に、市民ミュージアムが開館する前から収集してきた、植物や昆虫類、動物類、岩石類等、様々な標本もあわせて展示することであった。

また、アンケートの実施の事前や結果をもとに展示構成を考える際に、様々な助言・指導をいただいた。毎年1月～2月に美濃加茂自然史研究会は会合を持ち、翌年度の自然系の講座等についての検討を行ってきた。具体的には、今回は2011年2月10日に会合を持ち、研究会メンバーのうち8名の方が参加してくださった。展覧会で目指すことのほか、アンケートを実施すること、展覧会に向けての関連講座などについても話し合いを持った。アンケートについては、その設問の設け方について意見を頂いた。自然史研究会はそもそも、学術的な研究から自然にアプローチしているのではなく、身近な植物や生き物について知りたいというところから始まっている、学術的な内容については相当の準備を行ったりあるいは答えられなかったりする質問もあるかもしれない、事前に相談をしてじっくり進めていきたかったとの意見もあった。さらに5月6日にも会議を設け、展示に向けての相談を行った。

6. アンケートの結果と「みのかもの自然展」関連講座

「みのかもの自然展」に関連する講座の準備もあわせて進めていった。参加者とともに、でてくると想像できる質問に答えられるような調査、かつ文化の森の周辺でこれまでに行ったことのない調査というものを目指し、植物の調査をする「森コース」で2つを考えた。また美濃加茂自然史研究会のため池調査とも関連を持たせるため、文化の森のとなりの太郎洞池と中部台調整池と2つの池を調査する「水コース」を1つ設けることとした。

また先に触れたように、フォレストクラブ、のんびり自然観察会で「森の道草」ポストカード作りを行った。美濃加茂自然史研究会のメンバーに講師として関わってもらいながら、文化の森の植

物を「記録・調査・展示」する内容であった。どちらも 20 名弱の参加者があった。そのため、当初考えていた撮った写真の植物の名前を図鑑等で調べたり、植物の特徴からの調べ方を教えてもらったりするということではできなかった。結局、ただ植物の名前を覚えてもらい、それをメモしていく活動になってしまったことが少し残念であった。

フォレストクラブでは、7 月 16 日の「みのかもの自然展」のオープンの日に展示会の会場内で「遊ぶ」日も設けた。出来上がった展示に対して子どもたちがどのような反応を示すのか見たかったためである。初めに展示会の概要などを説明し、自由見学、その後鉛筆を持って「はっけんノート」に気になったものなどをメモした。最後に、気になったものの前で、どんなところが気に入ったのか、発表するという内容で行った。鳥などはく製やオオサンショウウオの骨格標本、その他の生き物の骨など、「モノ」の様子をじっくり見る姿が見学中には多く見られた。「モノ」による子どもたちへの展示という「語りかけ」がなされたと感じた。「展示を見て楽しかったところはどこですか」という問いに対して、次のように答えている。

- ・絵も書けたいろいろなものがかざってあったからたのしかった。
- ・オオサンショウウオのところ
- ・ほんものみたいなのを見たのが楽しかった。
- ・いろんな鳥があってかわいかったです。
- ・はくせいがあったこと

7. おしまいに

以上、振り返って見ると、「身近な自然についての不思議」を「展示」しようと試みた「みのかもの自然展」の「新しさ」は次の 5 つに集約されると言える。

- (i) 子どもの「不思議」が展示の基本・土台となっていること
- (ii) 「答え」は子ども（来館者）自身が見つけたり、気づいたりすること。そのための工夫を行っていること

(iii) 自然資料にこだわらない多分野にわたる展示資料があること

(iv) 外とのつながりを多く示したこと

(v) 意図的に手作り感、不ぞろい感を出したこと



写真 12 「ほぼ実物大パネル」一つだけ離して展示した

(v) について補足すると、あえて「きっちり」しないことを心がけ、手書きのコメントの吹き出しや画用紙を切って作った矢印を利用したり、「ほぼ実物大パネルの鳥」を 1 羽だけ離したり、床に直接置いたりしたことである。そのようにすることであえて「目を引く」ように試みた。

この展示意図は来館者に伝わったのだろうか。アンケートの自由記述を以下に引用する。

(子ども)

- ・おとうと 4 さいのまでたのしそうに絵を書いていました。
- ・第二展示室のコレクションが楽しかった。
- ・すごろくをしながらオナモミの成長がわかった。
- ・モンシロチョウの羽をけんぴ鏡で見て小さい羽みたいな物がたくさんあったところ。
- ・オオサンショウウオが大きくてビックリした。

土の色が場所によって違うから不思議だった。

- ・とてもたのしかったので、いろいろな人にいつてきてもらえるようにしたいです。
- ・いつも「ひつつきむし」と呼んでいたものがアレチヌスビトハギだった。

(大人)

- ・マニアックすぎず、子供にも分かりやすくしようと感じられる展示や構成になっていてとても良いと思います、なおかつ、大人の「知りたい」

という部分にも答えられるだけの物があると思います。

- ・全て楽しかったです。展示物が子どもの目の高さであり実際にさわれたり見ることができ、体験・体感できて楽しかったです。すごろくも楽しかったです。
- ・もう少し説明するパンフレットや読み物が掲示されてあるともっと良い。
- ・展示コーナーのまとまりが少し分かりにくい気がしました。
- ・自然とアートはとても近いなぁと思いました。昆虫のデザインも色も実はアート。昆虫たちと植物たちの組み合わせもアートに近いと思いました。
- ・私たちのまわりにはなんで？と思うことは実はたくさんあるということがヒントになりました。

今期の展覧会の中で、寄せてもらった子どもたちの「不思議」の全てに応えられたわけではなく、先にもふれたように、展示から外した内容もある。今後は、この応えられなかった「不思議」なども活かしていくことを考えていきたい。

【注】

- 1 青木豊「1 展示の概念」『新版 博物館学講座 9 博物館展示法』（雄山閣株式会社、2000 年）27 頁
- 2 大阪市立自然史博物館では、博物館と市民が共同で自然調査を行っていることは、よく知られている。2010 年には、数年かけて川の調査を行い、その結果を特別展として展示した「みんなでつくる淀川大図鑑―山と海をつなぐ生物多様性―」展が開催された。
- 3 2001 年「クワガタ・カブトムシ 見つけた！展」、2002 年「スマレはスマレ みのかものスマレ展」、2003 年「美濃加茂にサイやゾウがいたころ展」などの自然系展示は、美濃加茂自然史研究会という市民ボランティア団体の展示協力による展示である。標本などの展示資料の準備に、研究会メンバーの専門性が発揮されている。しかしここでは「広く一般に募集しあ

るいは呼びかけをし、趣旨に賛同して参加した市民」の参加した展覧会という意味で、これらの展覧会については考察の対象とはしないこととした。

- 4 2006 年 7 月 1 日～9 月 3 日まで開催した「生きる・くらす 鳥とひと展」のチラシより引用。
- 5 現代美術などの展覧会では、事前のワークショップといった形などで市民や子どもたちに参加を呼び掛けて、作品として出品してもらうことは多くある。
- 6 「文化の森活用委員会」とは、美濃加茂市内の小中学校の先生と文化の森の職員とで構成している。文化の森と言うミュージアムを学校の授業の中でどのように効果的に活用することかできるのか、ということを検討する会である。
- 7 2006 年から始まったみのかも文化の森の小中学生を対象とした定期講座である。年に 4 回ほど開催する展覧会と関連を持たせた内容や美濃加茂に深い関わりのある場所へ出かけるなどの内容で開催している。なお 2011 年度の登録人数は、24 名である。
- 8 みのかも文化の森の自然系の定期講座である。小さい頃から自然観察の楽しみを知ってもらいたいと願い、広く一般に募集している。そのため、幼児から小学生とその家族による参加がほとんどで、大人だけの参加者は少数派である。1 年間に 6 回ほどの観察会のほか、冬期には参加者の希望する内容での観察会を行っている。講師は、美濃加茂自然史研究会のメンバーである。2011 年度は、20 名の参加であった。
- 9 「森の学校だより」は美濃加茂市内の小中学校と美濃加茂市教育部・学校教育課に配布している、不定期のたよりである。内容は主にみのかも文化の森に来館した小中学生や幼児の学習の様子を伝えたり、みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアムで開催する展覧会のお知らせなどを紹介したりしている。各学校へは、クラスに 1 枚配布されるように学級担任の数分を印刷している。学級掲示等に利用されることを期待していたものである。過去にはこのたよりをそのまま学級通信の裏面に刷り込んで、児童全員に配布してくださった先生もいらしたと聞いている。
- 10 平成 23 年度全面実施の小学校理科の目標、平成 24 年度全面実施の中学校理科の目標の両方に、「自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」という文言が含まれてい

る（下線は引用者）。

- 11 2005 年度に開催した 栗田宏一「足もとの土展」
のことである。

（にしお まどか 美濃加茂市民ミュージアム学芸係）

【資料1】 アンケート用紙

「自然」についての疑問を募集しています！

みのかも文化の森では、この地域の身近な自然についての調査をおこなっています。たとえば、木や花、草などの植物のこと、鳥や魚、虫などの動物のこと、足元にある地面がどのようにできたのかということなど…（「自然」といってもたくさんの分野がありますね）。この調査をもとに考えたり、さらに調べたりして、みなさんに見てもらえるように、カニサイのいる常設展示室や企画展などで展示しています。みなさんの夏休みの研究のように、私たちも調査をするときには「〇〇について調べる！」とテーマを決めて、そのテーマにそっておこないます。

そこで、今回文化の森では、小中学生のみなさんが普段から気になっている「自然」についての「不思議だなあ」「どうしてかなあ」と思っている疑問をテーマにして調べたいと考えました。学校の授業のなかや通学路で疑問に思ったこと、見つけたこと、お休みの時にでかけて不思議に思ったことなど、教えてください。

どうぞご協力よろしくお願いします。

募集期間：～3月6日(日)ごろまで

文化の森のホームページのキッズコーナーでも書き込みができます。

名前を書く必要はありませんが、学校名と学年を教えてください。

----- 切り取りせん -----

自然についての疑問を募集中

美濃加茂市民ミュージアム

植物、動物、川、森・・・など、身近な「自然」のことについて、大人から子どもまでみなさんが「ふしぎだなあ」「なんでだろう？」と思っている疑問を集めています。いくつでもいいので教えてください。（用紙が足りない場合は、別の紙をつけもいいです）

たとえば、ダンゴムシの足は何本あるの？

サクラはどうしてまちがえずに春になるとさくの？

文化の森のとなりの大きな池には、どんな生き物がすんでいるの？ など



学校名： _____ 小・中・高 学年： _____ 年

【資料2 寄せられたアンケートのまとめと展示について】						展示に向けて					
アンケート結果						ブロック	内容	展示したいもの	動きとびげん展示室	おもしろ、つづらんど	
分類	番号	質問	所属	学年	年齢	→	森の道草	文化の森に咲いている花を撮影したポストカード (フォレストくふふ、のんびりで撮影) 花の名前、一言、撮影日、自分の名前	文化の森に咲いている花を 撮影したポストカード	今日咲いている 花の紹介	
a	1151	何で文化の森は、あるんですか。	中	2							
a	289	文化の森はいつできたか。	小	6							
a	1149	文化の森はなぜある	中	2							
a	29	文化の森はどうしてこの名前にしたの？	中	3							
a	694	なんでまゆの家があるの。	小	2							
a	266	文化の森の森は、いつから育ったのか。	小	6							
a	1017	文化の森はどうして自然がいついっしょなんですか？	高	小2							
a	327	文化の森の木はどのくらいにうめたんですか？	小	5							
a	1034	文化の森にはどんな木やぶつがある？	中	1							
b	28	文化の森のどりの大きな森にはどんな植物があるんですか？	小	3		→	森の木の太さを調べよう(小) 森の木の高さを調べよう(中)				
a	772	文化の森にはどんな植物が咲いているのか。	小	6							
a	307	文化の森ではどんな植物が咲いてるんですか？	小	5							
a	393	文化の森にはなんの植物があるのか。	小	6							
a	110	文化の森には、何種類の植物があるのか。	小	6							
a	47	文化の森の木の種類は、なんしゅるいあるのか。	小	3							
a	288	文化の森の木はどんな植物があるのか。	小	6							
a	285	文化の森は、何種類の木をうえていますか。	小	6							
a	784	文化の森には何本くらい木があるのか。	小	6							
a	30	文化の森でいちばん大きい木は何mあるのか。	小	3							
a	467	文化の森の森にはどんな木やどんな虫がいるのか。	小	6							
a	43	文化の森の森には、どんな虫がいるのか？どんな植物があるのか。	小	3							
a	1037	文化の森の大きな森には、どんな木があるのか。	中	1		→	夏休み講座「文化の森にいる生き物」で見つかった生き物を紹介				
a	1001	文化の森にはなにか動物はすんでいますか。	講	1							
a	425	文化の森には、どんな動物がいるのか。	小	6							
a	439	文化の森には、約何種類の動物がいるのか。	小	6							
a	457	文化の森は、どれだけの生き物がいるのか。	小	6							
a	288	文化の森には、どんな生き物がすんでいるのか。	小	6							
a	1038	文化の森にはどんな生き物がいるのか。	中	6							
a	553	文化の森はどれだけの動物がいるのか。	小	4							
a	560	文化の森にはどんな動物がすんでいますか。	小	4							
a	46	文化の森はどうぶつは、なんびきいるのか。	小	3							
a	50	文化の森の森には、どんな木やどんな動物がすんでいるのか。	小	3		→	文化の森の隣の池	項目だけ立てて分類0へ誘う	太郎洞池についての説明だけ	太郎洞池の絵図、文書など	太郎洞池を見に行こう
a	1156	文化の森のどりの池には、どんな木や動物がすんでいますか？	中	2							
a	1146	文化の森のどりの池には、どんな木や動物がすんでいますか？	中	2							
a	760	文化の森のどりの大きな池には、どんな木や動物がすんでいますか？	小	6							
a	346	文化の森のどりの大きな池には、どんな木や動物がすんでいますか？	小	5							

Number of Children	Frequency
0	1
1	4
2	8
3	7
4	4
5	2
6	1

タネからひこうきへ	野口さんの飛行機
「巨大」	
ひらがらひみつ	哺乳類の剥製1、ひつこむし 夏のひつこむしをみにくう ひつこむしをつけみよ ひつこむしをのひつこころをみてみよう 見学者3
	福徳鏡、ひつこむし(2種) ササウサ、オオナモミ

木のなせ	木の一生 ▼ ひつきむしを例にとって、草花の種からの一生を説明する中で、子どもたちの質問にも答える内容 植物の体の構造 たね → 芽 → 伸びる → 花 → たね 草と同じような流れになるが、比較しながら	模式的なもの レプリカ? 模式的なもの	
	根つことの関係 どのように栄養を吸収するのか		木の幹に耳を当てに行ってみよう (水を吸い上げるおとがきこえるかも?)

d	356	火山のようなくらには、なんで木がはえるの？	小	5	
d	336	インゲンマメは！でんぶん！を使い発芽するけど、他の植物は何で発芽します？	小	5	●
d	429	草は水をあげないでなんで育つの？	小	6	
d	431	なんで木だけの自然ができるの？	小	6	
d	446	どうして森はすずしいのか。	小	6	
d	729	森のてき方	小	6	▼
d	114	森はどうやってできたの？	小	6	▼
d	88	木が小さい時から大きくなるまで何年かかるか？	小	4	▼
d	740	木のじゅみょうは？	小	6	▼
d	822	木のじゅみょうはどのくらいあるの？	中	1	▼
d	121	木は何年まで生きられるの？	小	6	▼
d	671	木は何年くらい生きていられるんですか？	小	2	▼
d	41	いちばん年上の木は何歳ですか？	小	3	▼
d	817	木以外で生き残る植物は何かあるか。	中	1	
d	273	桜の木は、何年ものか。	小	6	▼
d	196	木は大きくなるまでに何年かかる？	小	6	▼
d	739	木は何年かけて、大きくなるの？	小	6	▼
d	296	1年でどれくらい木が切られているの？	小	6	▼
d	40	いちばん大きな木はどれですか？	小	3	▼
d	487	木はさいごうのくいの長さまでのびるのか？	小	6	
d	154	どうして木は大きく育つの？	小	6	
d	741	木の年輪はどうやって増えるか。	小	6	○
d	122	もし木をきって固くて自分をまもるためにあるけど、細かい穴つくてんで呼吸しないの？	小	6	○
d	117	木のみきって固くて自分をまもるためにあるけど、細かい穴つくてんで呼吸しないの？	小	6	
d	37	じゅえきがいちばん多いのはどういう木なの？	小	3	▼
d	167	なんで木は緑がはえるの？	小	6	▼
d	168	なんで木に横こがっているの？	小	6	▼
d	171	なんで木は大きくなるの？	小	6	▼
d	763	木の生えかた	小	6	▼
d	790	木はどうしてまっすぐ生えるのか。	中	1	▼
d	827	木はなんで細い木と太い木に分かれているの？	中	1	▼
d	119	木ってどうして人のように養分をきゅうしゅうして成長できるの？	小	6	▼
d	388	大きい木になるまでにどのように栄養をもらっておおきくなっているのか。	小	6	▼
d	145	木はなぜさつそうのように下に葉がはらないの？	小	6	▼
d	352	木はなぜなぜにみかんたんをすってさんそをばけるのですか。	小	5	▼
d	367	木はなぜ二酸化炭素をすうの？	小	5	▼
d	379	植物はどこから酸素をすうのか。	小	5	▼
d	482	一本の木からどれだけの酸素ができて、どれだけのCO2を吸収するの？	小	6	▼
d	128	木はなんで酸素をだすの？	小	6	▼
d	871	木はどこからみつを出すか？	中	1	▼
d	851	なぜ木は葉をだすのか？	小	1	▼
d	151	どうして葉はなるの？	小	6	▼
d	354	どうして木には、葉や花ができるのですか。	小	5	▼
d	763	リサはなぜどんぐりをたべるのか。	小	6	▼
d	237	森はどうやって守られている？	小	6	▼
d	518	どうして森は緑々しているの？	小	3	▼
d	928	森はどうして緑々しているの？	中	1	▼
d	1011	葉はなぜ緑なの？	中	1	中1
d	112	はっぱはどうしてみどりなの？	小	6	▼
d	186	森はなぜ緑色なの？	小	6	▼
d	934	森はなんで緑色なの？	小	1	▼
d	179	木はなんで茶色なの？	小	6	▼
d	56	森はどうしてすずしいの？	小	4	▼
d	973	森にはどうしてたくさん木が生えているのか。	小	1	▼
d	84	森にはなぜ、きかてくさんあるのか？	小	4	▼
d	833	何で森や山には木がおいしげっているの？	小	1	▼
d	92	なぜ、森は木の葉がさかづかうのか。	小	4	▼
d	926	森と林の違いってなに？	中	1	▼
d	939	森と林のちがいはなに？	中	1	▼
d	942	林と森のちがいは？	中	1	▼
d	640	林と森の違いは何？	小	2	▼
d	51	森と林との区別は何？	小	3	▼
d	253	どのはんいから…森か？	小	6	▼
d	254	どのはんいから…森か？	小	6	▼
d	262	森と林のちがいは？	小	6	▼
d	932	森と林の違いは何？	中	1	▼
d	738	森は何年たつと大きな森になるの？	小	6	▼
d	419	森はどうやってできるのか。	小	6	▼
d	479	森はどうしてできるのか？	小	6	▼
d	1036	山は、季節が変わるごとに色あざやかに染まるのだろうか？	中	1	▼
d	819	どうして木は山とくに密集しているか。	中	1	▼
d	99	どうして山には木がたくさん生えているの？	小	6	▼
d	982	ひとつの山にどのくらい木があるのか。	中	1	▼
d	267	なんでこころへんの山にはスギの木が多いのか。	中	1	▼
d	890	山はなぜでくの？	中	1	▼
d	104	山はどうやってできるの？	小	6	▼
d	821	どのようなしょうけんがあれば山になるの？	中	1	▼
d	662	山はどこでできているんですか？	小	2	▼
d	691	なぜ森には木がたくさんあるの？ 一本のこと？	小	2	▼
d	792	まっほうりばなんでもの形なんですか。	中	1	▼
d	793	もみじはなんであの形なんですか。	小	1	▼
d	142	どうして木になるのは果物で畑になるのはやさいなの？	小	6	▼
d	105	どうしていちようには葉をつけるものと、つけないものがあるの？	小	6	▼
d	981	モンナンは何でくさいか？	中	1	▼
d	856	さんなんはなぜくさいのか。	中	1	▼
d	534	なんできんはんは、くさいの？	小	3	▼
d	64	さんなんをさわるとどうしてかぶれるの？	小	4	▼
d	75	自然にどうしてさわると手がかぶれてしまう葉があるのか。	小	4	▼
d	656	ふきのどうはんのしゅるい	小	2	▼
d	629	リコモってめずらしいものなんですか？	小	5	▼
d	786	くさのこのわけが？	小	6	▼
d	181	モノはなぜかみんないの？	小	6	▼
d	182	モノはなぜ木などからはえるの？	小	6	▼
d	212	どうして竹林の地面は地割れない？	小	6	▼
d	274	竹には、どうして空かんがあるのか。	小	6	▼
d	794	竹はなんで間が空なんですか。	中	1	▼
d	878	竹には何種かがある？	小	6	▼
d	391	竹の花が見たい。	中	1	▼
d	786	ある山にあった木がすごく不思議な形をしていました。なぜこんな形になるんですか？（一図がついていました。）	中	1	▼
d	673	何でやさいは食べれるとわかったの？	小	2	▼
d	906	ピーマンはなぜ黄になる上中がどうなるの？	中	1	▼
d	907	じゃがいもはなぜ黄の？根なの？どっちなの？	中	1	▼
e	258	なぜ文化の森にサイがいるんですか？	小	6	○
e	280	カニサイはなんでいなくなったんですか？	小	6	○
e	281	文化の森あたりどのくらいのカニサイがいたんですか？	小	6	○
e	38	土はどうしてちいさいの？	小	3	○
e	39	石はどうしてちいさいの？	小	3	○
e	765	石はどこからできているのか？	小	6	○
e	698	どうやっていいは、できるの？	小	2	○
e	118	石ってどんな方法で作られたの？	小	6	○
e	170	なんで石はかたいの？	小	6	○
e	665	なんでせいかじゅうに土があるのですか？	中	2	○
e	232	石(石)って何でできているの？	小	6	○
e	271	地層の種類は、ねんど、砂、小石のほかどんなものがあるのか。	小	6	○
e	699	てつはどうやってできているの？	小	2	○
e	413	何で化石がでるのか？	小	6	○
e	315	化石はなぜできるか？	小	6	○
e	225	化石って何種類あるの？	小	6	○
e	864	地球の内部はどうなっているのか？	中	1	○
e	697	地面はどうやって作られるの？	小	2	○
e	72	地面はどこからできたの？	小	4	○
e	442	地面はコンクリートがなぜやうなるのか？	小	6	○
e	983	地面の一番下のところをはきから何年頃にできたのか。	中	1	○
e	582	地球をかん通させたらおちないの？	小	4	○
e	399	地球はなんでできたの？	小	6	○
e	59	地球や土星はなんでそういう名前になったの？	小	4	○
e	206	地球の中心にはなにがあるのか。	小	6	○
e	95	ちきゅうはどうやってできてるのか。	小	4	○
e	791	地球はなぜまんまるなの？	中	1	○
e	388	なぜメタンハイドレートは、海底にあるの。そしてなぜ氷となりてくるの？	小	5	○
e	730	なぜ雪がふるのか？	小	6	○
e	400	雨、雪などはどうしてふるのか。	小	6	○
e	649	冬はなんで雪が降るの？	小	1	○

	なぜ二酸化炭素を吸収し酸素をだすのか どこから酸素をだすのか みつはどこからでるのか 葉はなぜ緑色か 木の実について 木から林、森、山への変化 遷移について			
→	大きな木			
	市内で長生きの天然記念物の木を紹介 → 県指定 ムクノキ、山ノ上のサクラ → 市指定 白山神社の大杉、諏訪神社の大杉 シダレザクラ	木の場所の地図と写真	見に行ってみよう	
○	きりかぶ	年輪を見てみよう	年輪のできたかについて	森の中にある切り株を見に行ってみよう
	調査報告	みのかもの自然なう 森コース2ツブライ調査結果報告 文化の森でみられるドングリ ドングリの木とナラガレムシのこについて	ドングリの木の春からの様子写真 ナラガレムシの写真	標本は常設でみよう

→	足もとのふしぎ1	みのかもを形作る大地1 カニサイについての説明	常設へいってみよう 県博、化石林公園	
○	足もとのふしぎ2	土の色はなぜいろいろあるの 色のついた作品から、色のつく訳	栗田さんの土作品	
○		みのかもの大地をつくる石	石の標本(数点)	常設へ行く 佐光さんの作品 を見に行こう
○		石はなからできているのか		石に含まれているものを顕微鏡で見よう
○	足もとのふしぎ3	みのかもを形作る大地2	収蔵している化石	石の博物館、化石博物館

e	13	雪はなぜ冬しかふらないの？	小	1
e	423	雪はどうやってふるのか。	小	6
e	501	なんで冬になると雪がふるの。	小	3
e	512	なんで雪はふるの。	小	3
e	583	なんで冬になると、あられとか、雪がふるの？	小	2
e	96	ゆきはどこからつくられているのか。	小	4
e	663	冬には雪がふります。雪はなにからできていますか。	小	2
e	508	どうして雪は白色なの？	小	3
e	513	なんで山おくはささいの。	小	3
e	146	どうしてあられがふるの？	小	6
e	240	雪はなぜかたまるのか。	小	6
e	8	どうして寒いと氷ができるのか？	小	1
e	308	どうしてもしらがでるのか。	小	5
e	505	なんでふんかする山とふんかしない山があるの。	小	3
e	501	どうしてしんがくるの？	小	3
e	510	なんでしんはくのか。	小	3
e	639	地しんはどうしておこるの？	小	2
e	799	山には活火山とそうでないものがあるけどなぜそうなるのか。	中	1
e	859	世界にプレートは何個あるのか。	中	1
e	527	山はなんで高いの。	小	3
e	494	山はなんで高い。大きい？	小	3
e	351	山はどうしてできるんですか。	小	5
e	956	山はどうやってできたか。	中	1
e	124	どうやって山はできたの？	小	6
e	478	山はどうしてできたのか？	小	6
e	248	山ってどうやってるの？	小	6
e	275	山はどうやってできたのか。	小	6
e	905	山はどうやってできたのか。	中	1
e	343	山の上にいくとなぜ寒くなるのか。	小	5
e	452	どうしてくもはできるの？	小	6
e	458	くもはどうやってできているのか。	小	6
e	404	くもはどうやってできるの？(空の)	小	6
e	198	くもはどうやってできるの？	小	6
e	600	くもはどうやってできているの？	小	4
e	215	くもはなにできていますか。	小	6
e	20	空の雲は何でできているの？	小	1
e	411	雲はどこにあるのか。どこでどのようにできるか。	小	6
e	412	雲はどこでどのようにできるか。	小	6
e	60	どうして雲があるの？	小	4
e	194	雲には何がふくまれているのか？	小	6
e	260	なぜ、雲はできるの？	小	6
e	424	雲をさわりたい。	小	6
e	585	雲はどうしてぼくで見たときより見えてとおくから見るとわたにみえるんですか。	小	4
e	557	どうして(くも)は白いの？	小	4
e	82	くもは、なんでうかんできているのか？	小	4
e	588	なぜ雲には色々な形があるの？	小	4
e	647	なぜ雲は形がいろいろあるの？	小	1
e	139	何で雨くもはふくの？	小	6
e	16	どうして雨が降るときに雲が暗い色になるの？	小	1
e	184	雲はどうして形を変えるの？	小	6
e	185	雲はどうして動いたりするの？	小	6
e	191	雲はできて平均どのくらいの時間流れていけばなくなるの？	小	3
e	528	雲はどのくらいの高さにあるの。	小	6
e	540	風はどうしてふくの？	小	4
e	213	風はなんでふくの？	小	6
e	221	風はどこからくるの？	小	6
e	868	風はどこからふくの？	中	1
e	916	風はどこからふくの？	小	1
e	953	風はどこから来るのか？	中	1
e	661	風はどこから来ているんですか？	小	2
e	175	なんで風ってふくの？	小	6
e	502	どこから風はふいているのか？	小	3
e	861	どうやって風はふくの？	中	1
e	923	どうして風がふくの？	小	1
e	247	風はどのようふけるの？	小	4
e	567	風はどうして強い風や弱い風がふくの？	小	6
e	168	なんで風があるの？	小	6
e	440	なぜたつまきが起るのか？	小	6
e	161	なぜ気圧があるの？	小	6
e	94	そらはどうやってできたのか。	小	4
e	1008	空はなぜ青いの？	中	1
e	406	なんで、空は青いの？	小	6
e	397	空は何で青いの？	小	6
e	448	どうして空は、青いの？	小	6
e	450	どうして空は青いの？	小	6
e	459	空はなぜ青いの？	小	6
e	493	空は何で青いの？	小	3
e	588	なぜ空は青いの？	小	4
e	261	なぜ、空は青いの？	小	6
e	556	どうして(空)は青いの？	小	4
e	587	空はどうして青いの？	小	4
e	831	空は何で青いの？	中	1
e	876	空はどうして青いの？	中	1
e	919	どうして空は青いの？	中	1
e	922	どうして、空は青いの？	中	1
e	578	空はどうして朝・昼・夜の色がかわるの？	小	4
e	929	どうして空はいろいろな(微妙な)色になるのか。	小	1
e	297	空はどこまでつづいているの？	小	6
e	230	地面と空の境目はどこ？	小	6
e	954	なぜ暑いときと寒いときがあるの？	中	1
e	591	どうして夏は暑くても暑い？	小	4
e	177	なんで天気があるの？	小	6
e	408	なんで天気を予想できるか。	小	6
e	69	なんではれるの？	小	4
e	70	なんであめがふるの？	小	4
e	214	なぜ雨がふるのか。	小	6
e	434	なんで雨はふってくるの？	小	6
e	470	どうして雨がふるの？	小	6
e	797	どうして天気は晴れているのに、雨が降るときがあるのか？	中	1
e	893	どうして雨や雪は種類があるの？例えば驟雨や五月雨？	中	1
e	61	どうしてにじがでるの？	小	4
e	643	なぜ雪がなる？	小	1
e	432	何でかみなりはなるの？	小	6
e	135	なんでかみなりができるの？	小	6
e	220	雷はどうやってできるの？	小	6
e	1	カミナリはどうしてなるの？	小	1
e	874	雷はなにから出ている？	小	1
e	160	なぜ沖縄にたくさん雷がくるの？	小	6
e	917	雷はどうしてつくるのか。	中	1
e	925	どうして雷がくるの？	中	1
e	570	太陽の温度のはかり方。	小	4
e	549	太陽の温度は、どのようにしてはかったのですか。	小	4
e	550	太陽の温度はどうやってはかるの？	小	4
e	576	太陽の温度はどうやってはかるの？	小	4
e	577	太陽の温度は、どうやってはかるの？	小	4
e	590	どうして太陽はちゅうにあってとてもおおいのにこの地球まで光がとどくの？	小	4
e	15	どうして太陽は明るい？	小	1
e	538	太陽がなくなるとどうなるのですか。	小	4
e	568	太陽は何ぞ。	小	4
e	572	太陽の光。	小	4
e	18	どうして太陽は朝のほって夕方しずむのか？	小	1
e	573	月のできた。	小	4
e	465	月がたまに赤く、大きく見えるのはなぜ。	小	6
e	693	ちゅうはどのようにして出たの？	小	2
e	469	宇宙はどれ位の大ざやの？	小	6
e	475	宇宙は今から約何年前にできたか。	小	6
e	476	地球は約何年前にできたか。	小	6
e	611	どうしてちゅうがあるの？	小	5
e	575	なぜちゅうは「さんそ」がないんですか？	小	4
e	913	宇宙に重力がないのはなぜ？	中	1
e	723	宇宙って何万キロメートルある。	小	6
e	610	どうしてちゅうがあるの？	小	5
e	415	宇宙には何があるの？	小	6
e	250	どうして地球ができたの？	小	6
e	477	水星、金星、地球、火星、木星、土星、天おう星(？)、海おう星(？)はどういう順番でできたか。	小	6
e	961	どうして川と海と海に地球はわかれたのか。	中	1

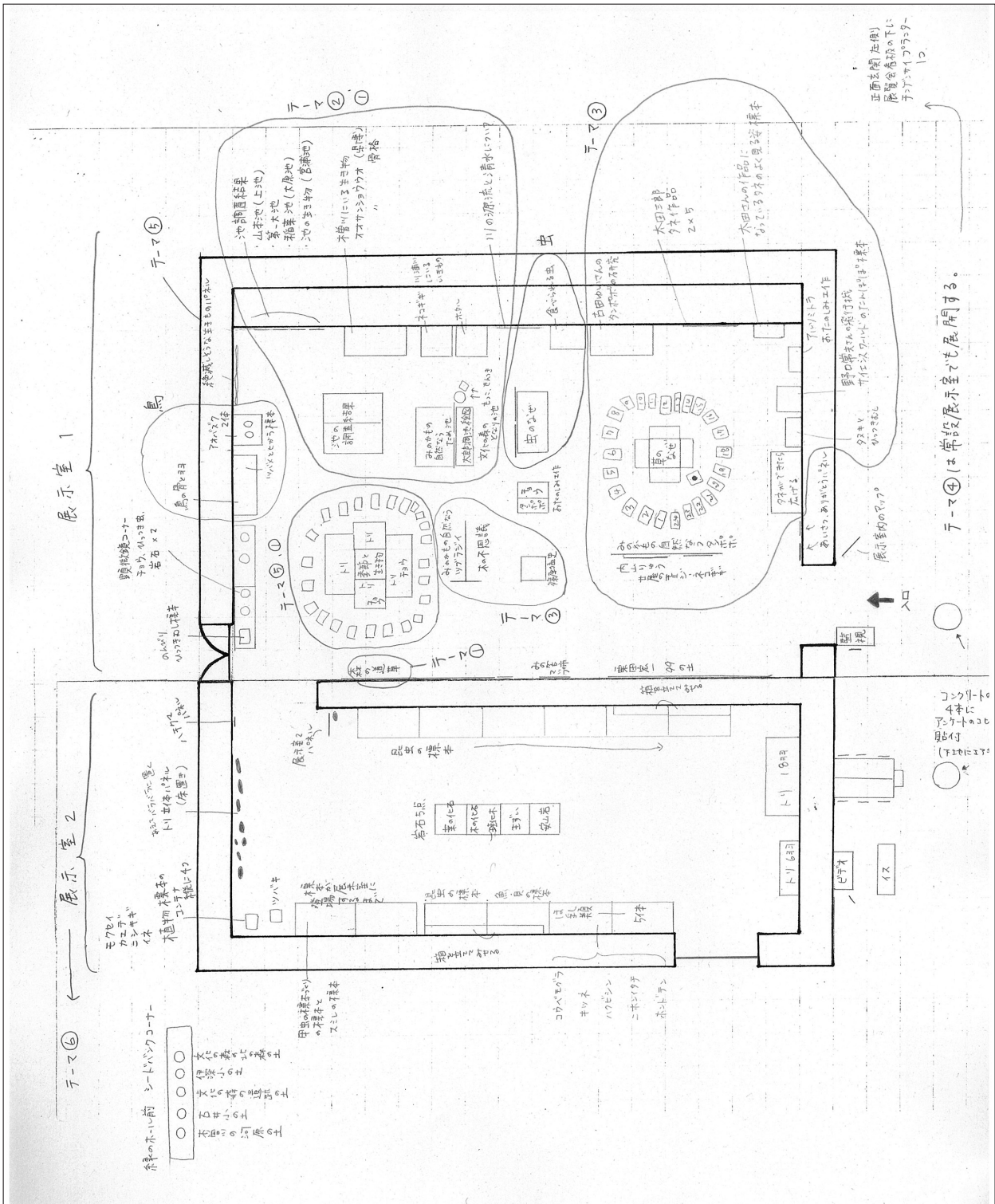
[illegible]

食べられる虫	伝承料理の会の方から伺った、「虫」を食べる料理	写真パネルなど	四季を食べる講座の紹介
虫	昆虫とそれ以外の「昆虫」にた生き物の体の比較(チョウとムカデなど)	まゆの家へついで、おかいこの飼育の様子を見よう(この時期にお婆の飼育ができるのかこれから調整)	ちょうちょの模倣作り 昆虫の足に毛は生えているのか 顕微鏡コーナー チョウの羽根軟弱に見えぬよう
	虫の世界		
	虫の食べ物 虫の一生(セミとチョウ、かぶと虫など比較しながら)		

その他	マップ	わたしたちのすむ みのかも 自然マップ 展示してあることがら地図の上にまとめるもの
	ハツカダイコン	オープニングセミナーでタネまき
	ワークシート的なもの	スタンプカードつき(とびだ せて行ける所におく)

- ・年齢欄にある例えば「小2」は、小学2年生と言うことである。数字だけのものは、回答した子どもの年齢を指している。
- ・年齢欄の右側にある○や△などの記号は、同じテーマに集約できるのではと考えたもの。
- ・「展示に向けて」の内容は、最終案ではない。
- ・個人名が書かれているものは、内容に支障のない、名前を特定できないようにした。

【資料3】 展示室のレイアウト図



岡本一平「新水や空 俳優の部」

— 出版物と早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵の原画

菊地 由花

朝日新聞で漫画を手がけ、漫画漫文という新しいスタイルを生み出し、絶大な人気を得て、漫画の地位を引き上げた岡本一平（一八八六—一九四八年）は「近代漫画の父」とも呼ばれている。戦中、岐阜に疎開した一平は最晩年を加茂郡古井町下古井（現在の美濃加茂市古井町）で過ごし、そのまま居宅で亡くなっている。

「新水や空」は一九二九年、一平が朝日新聞紙上で連載した漫画である。歌舞伎など舞台役者の似顔絵を描いた「俳優の部」は一月五日から四月七日までの計六〇回、政治家の似顔絵を描いた「政治家の部」が四月二十七日から六月二十八日までの計四十回連載された。

一月五日の第一回目には一平による「ことわり書」が記されている。

五六年か七八年前の事と思ふ、坪内逍遙先生より御弟子を通じて拙畫を御需めに預かつた。非常に光榮に感じただけそれだけいぢけてしまつて手がだせず氣に病みながら今におよんだ。今度記念演劇博物館なども出来、今こそ描いて捧呈する好機ぞとばく然たるものがしきりに背中を突く。今とてもさう自信を持つて先生を向うに回し大だんびらのやうに筆を揮り回せる次第ではないが兎に角描く。

先に新聞に發表してその後これを畫帳に作つて捧呈するのは失禮にはきまつてゐるが永年刊行物相手に描きつけた習慣から新聞に連載するとなると、是非でもぬ縮を突破して描く第二の天性が出来て居る。そこで學藝部の了解を得てこの便宜により描き續ける次第である。なほ筆者の心底を探ればこの懸命

の仕事は一應なじみの讀者にも見て頂きたいといふ料簡が無い事は無い。

畫家のどん慾として特に先生のお許しを願ふ次第である。

「新水や空」といふのは耳鳥齋の俳優繪帳に「水や空」といふのがある。

耳鳥齋は嘗て好きであつた幕府時代の漫畫家ゆゑこの俳優似顔繪帳もそれに因んだ名をつけた。一

ここには、「新水や空」の制作にあたり坪内逍遙（一八五九—一九三五年）が関係していたことが伝えられている。坪内逍遙は、加茂郡太田村（現在の美濃加茂市太田本町）にあつた旧尾張藩太田代官所の役宅で生まれ、約十年をこの地で過ごした。『当世書生氣質』『小説神髓』等の執筆や、シェイクスピア全集の完訳で知られ、文学から演劇に至るまで功績を遺した人物である。「新水や空 俳優の部」の原画は、「ことわり書」の通り、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に収蔵され、現在も保管されている。美濃加茂市にゆかりの深い二人の接点となつたこの作品は、一平の似顔絵漫画の真骨頂といえる傑作である。

美濃加茂市民ミュージアムでは二〇一三年二月から、企画展「岡本一平展」を開催する。一平と逍遙、当館ではこれまでそれぞれに紹介してきている。今回の展覧会では一平の画業の中で「新水や空」の位置づけを明らかにし、一平と逍遙の関係性から視野を広げてこの作品の歴史的な価値を探りたいと考えている。本稿は、調査研究の最初の段階として、文献などの基礎的な情報をまとめ、課題の整理を目的とする。なお、以降の調査の結果は、当館での「岡本一平展」の中で報告することとしたい。

「新水や空」出版の状況について

「新水や空」は朝日新聞での連載終了後、様々な出版社から体裁を変えて発行されている。最初に、「俳優の部」を収めた『一平全集 第四巻』が先

進社から発刊された。

①『朝日新聞』『新水や空』俳優の部

一九二九年一月五日～四月七日

②『朝日新聞』『新水や空政治家の部』

一九二九年四月二十七日～六月二十八日

③『一平全集第四巻』『新水や空』俳優の部

一九二九年十月五日 先進社

③の全集での「新水や空」の刊行について『一平全集月報 第四號』では「同集は、岡本先生がわが劇界の恩人坪内先生にデゼケートしたもので、同書の出版を希望するものが澤山ありましたが、一切断り、全集にのみ入れることになったもので、これ會員のみの特権であります」という理を掲載している。ところがその後、他社からの出版が相次いでいる。現時点で確認できたものを挙げておく。

④『新水也空俳優の部』

一九二九年十二月五日 文藝春秋社

座右寶刊行会

⑤『新水也空政治家の部』

一九二九年十二月五日 文藝春秋社

座右寶刊行会

⑥『一平全集第十巻』『新水や空』政治家の部

一九二九年一月六日 先進社

⑦『新水也空俳優の部』

一九三〇年一月六日 素描社

⑧『新水也空政治家の部』

一九三〇年一月六日 素描社

⑨『新水也空演劇篇』

一九三〇年九月十二日 先進社

⑩『新水也空政治篇』

一九三二年一月十二日 先進社

「新水や空」の「や」の表記だが、表紙は平仮名の「や」で書かれています。奥付では「也」となっている場合があり統一されていないため、書名は奥付の記述を採用した。また、「俳優の部」「政治家の部」という記載も、①③⑥については題名として明示されていないかった。

後に続く出版の鍵となった人物は、実は『一平全集』の編集にも関わっていた。一平の門徒であった旭正秀（一九〇〇～一九五六年）は「一平全集編纂について」の中で次のように記している。

先生の全集をまとめることは、ずっと前から私や宮尾しげを等同門の懸案だったのですが、今度鈴木氏亨氏や先進社の絶大な厚意と盡力でそれが實現されることは誠に私達門下生としてこの上なき喜びであります。三

鈴木氏亨、宮尾しげを、そして旭正秀は一平全集編輯部の筆頭である。宮尾しげを（一九〇二～一九八二年）は一平塾に最初に入門した人物である。また鈴木氏亨は『一平全集月報 第十二號』に「新水也空」に就いて^五を執筆し、「新水や空」を制作している最中の一平の様子を細かに描写し伝えている。

④⑤文藝春秋社・座右寶刊行会本は、一枚一枚の絵がめくりの状態で箱に収められている。編輯者は鈴木である。ちなみに④⑤が発行された一九二九年十二月五日は、一平が朝日新聞の漫画全権として、ロンドン軍縮会議の取材のため、神戸港から出発した日でもある。

⑦⑧素描社本は和とし本の体裁で、宮尾が編集者、旭が発行者である。また関係性は定かではないが、⑦⑧の発行から一ヵ月後、宮尾が編集者、旭が発行者となり⑦⑧と同形本で耳鳥齋の『水也空』が発行されている。^六

最後に、⑨⑩の『新水也空 演劇篇』『新水也空 政治篇』は③⑥の全集とそれぞれ表紙と本編がほぼ同じで、背に長方形の黒塗りが施され、その上

に金字で題名が書かれている。また、奥付のタイトル部分にも紙片が貼り付けられたものである。

ここからは、俳優の部に絞り、各本を比較してみたい。

すべての本の始まりには、絵とともに序文がある。①③⑨には、先に引用した朝日新聞の「ことわり書」がそのまま掲載されている。④には一平が昭和四年三月に書いた墨書の序文が印刷されているが、この序文は「ことわり書」とわずかに内容が異なっている。また⑦には、④の序文を活字化したものが掲載されている。

次に、絵の部分と比較してみる。③全集と⑦素描社は、役者の絵が四角の枠の中に十分な余白をとって納められている。それに対して④文藝春秋社は演劇博物館所蔵の原画に忠実であり、紙の端まで描いているもの、余白を多くとっているものなど、画面構成にも変化がある。①③④⑦の絵と原画を、片岡仁左衛門の片桐旦元を例に比べてみる(図1~5)。演劇博物館の原画「片桐旦元」には、墨書で「一平写」と書かれており、「一平」という印が捺されている(図5)。この印が印刷されているのは、④文藝春秋社本のみである(図3)。この他の役者についても、原画と④、そして①③⑦のまとまりで若干異なっている事例がある。以上のことから推測できるのは、①新聞③全集⑦素描社は恐らく同じ版を扱っており、④文藝春秋社は演劇博物館にある原画を下にして、忠実に再現するような形で作成されたということである。

更に坪内逍遙の序詞が入っているのは④だけであり、①③⑦には入っていない。ただし、この序詞「自家心古」(図6)は、実際に原画に収められた序詞とは違っている。(図7)

このほかにも、各本によって差異が見受けられる。⑦素描社の尾上菊五郎の「更科姫」には他の本にはみられる紅葉の枝が描かれていない。さらに、市川男女蔵の「吉三」の原画には、「片桐旦元」と同じ「一平」という印が押されているが、この印はどの刊行物にも印刷されていないなど、本ごとに、図柄ごとに多少の違いがある。また、役者の順番についても、本

によってそれぞれ異なっている。

こうした様々な違いがなぜ生まれたのか。また、なぜこれほど様々な体裁で、しかも出版社を替えて、発刊することが可能であったのか。その背景については今後の調査の課題である。

逍遙日記からたどる演劇博物館収蔵までの経緯

企画展に向けた予備調査として、二〇二一年十一月一日、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館で「新水や空 俳優の部」の原画を拝見した。(図8)

演劇博物館は、一九二八年に坪内逍遙の古希とシェイクスピア全集の完訳を機に創設、開館した。能や歌舞伎から新劇に至るまで、国内外の演劇に関する資料を所蔵する博物館である。芝居の道具、衣装、ポスターや看板写真のほか、役者や舞台を描いた浮世絵が多数収蔵されている。逍遙自身が芝居絵等の収集に熱心に携わっていた。

原画は上下二巻の折本で、一枚一枚の絵が貼込まれた状態である。それぞれの紙片は若干大きさが異なっている。折本には「寄贈者 坪内雄蔵氏 昭和四年六月廿四日」と書かれた紙片が貼付されている(図9)。原画には、刊行物ではつぶれてしまうような筆の勢いや墨の潤渇が生きており、役者の表情や立ち居振る舞いに躍動感が感じられる。二巻はそれぞれ桐箱に収められているが、その表には一平の墨書で「新水や空」と書かれている(図8)。また、箱裏には「謹呈／坪内先生／一平生／昭和四年十一月」ともある。(図10)。

下巻は二月二十二日の第三十四回以降の原画と、冒頭に坪内逍遙が書いた序詞「自家心古」が収められている(図7)。これは、先にも書いたとおり、④文藝春秋社にある逍遙の書とは異なるものである。(図6)

最初に引用した「ことわり書」の文頭に「五六年か七八年前」とあるが、大正一〇年代に一平は雑誌『新演芸』(玄文社)や『演劇・映画』(プラトン社)

紙上で「役者生命摘出」あるいは「俳優生命摘出」と題し、役者絵を連載している。逍遙が博物館のために様々な芝居絵を集めていたことを考えれば、弟子を通じて一平の絵を求めたきっかけが、これらの連載であった可能性が高い。一平と逍遙の直接的な親交が、いつ、どのような形で始まったかは定かではない。ただ、「坪内逍遙先生は熱海へ行かれた晩年にお目にかかった。」^{二〇}と一平自身も記していることから、「新水や空」の件からそれほど遡ることはないように思われる。逍遙は早稲田大学の講義を一九二七年十二月に打ち切ってから、熱海に暮らしている^{二一}。また、一平が逍遙の似顔絵を描いた漫画漫文がいくつかある^{二二}。

中村八郎が書いた「岡本一平画伯の漫畫漫文 坪内博士の言葉」^{二三}には、「新水や空」の連載が始まって間もない頃、逍遙に気に入ったかどうかを尋ねた時のエピソードが綴られている。質問に対し逍遙は、「結構だよ。直接でないから別にお禮の手紙も出さなかつたが。」と答えたという。やはり、「ことわり書」のとおり、逍遙が一平に直接「新水や空」を依頼したわけではなかつたことが分かる。更にこの文中で中村は、逍遙が松本幸四郎、片岡仁左衛門、伊井蓉峰がよくできている、澤田正二郎を見逃したと言つたと記している。幸四郎は一月五日の一回目、仁左衛門は一月十一日の六回目、伊井は一月十四日の八回目、澤田は一月二十二日の十二回目にあたる。^{二四}では、原画が出来上がってから、どのように逍遙に渡されたのであろうか。逍遙は日記をつけていた。この日記は早稲田大学演劇博物館内にある財団法人逍遙協会から『未完・坪内逍遙資料集』として、菊池明氏の校訂による『逍遙日記』が刊行されている。一九二九年の日記を読むと、岡本一平の名が幾度も登場する^{二五}。そこから、演劇博物館へ収蔵される経過が部分的に分かる。

四月四日 午後 岡本一平来訪、「新水や空」第一帖持参、かの子の

散華抄の序を頼まれ、其代りに題字を書くべしと約す、夕

刻に続を携へて再来

四月五日 揮毫

伊地知の First Folio トビラに「無價宝珠」又岡本の妻かの子の「散華抄」の題字「多調多彩」いづれもただちに送付

四月七日 午後 揮毫 春城の小帖と曾我兄弟遺蹟碑と岡本の「多調多彩」の下書

四月十二日 午前午後 揮毫 丸屋の額 岡本の額 伊地知の額

四月十四日 岡本一平より礼状

十一月十五日 午前 岡本一平、其妻かの子と来訪、「散華抄」豪華版持参、来月二日挙家洋行、二年間滞留云々

十一月二十一日 東京駅着(十二時)駅にて食事を済まし帰宅、すぐ演博行、河竹に岡本の「新水や空」下巻及び田中穂積へ頼みの良寛二枚を渡す

四月四日の「第一帖」という言葉そして十一月二十一日の「新水や空」下巻」という記述から、恐らく一平はこの原画を二回に分けて寄贈している。四月四日の時点では、まだ朝日新聞での連載は終了していない。逍遙の寄贈票にある「六月廿四日」(図9)とは、上巻が演劇博物館に収蔵された日付であり、下巻は恐らく十一月十五日の来訪時、一平の妻である岡本かの子の『散華抄』^{二六}とともに

に渡されたのではないだろうか。そうであれば、十一月二十一日に演博で河竹に渡したという日記と箱書きの「昭和四年十一月」(図10)という記述に整合性が出る。

またこの日記に記載はないが、四月十三日、逍遙が一平に宛て手紙を書いており、『没後50年 岡本一平展 現代マンガのパイオニア』の図録の中に紹介されている^{一七}。

拝啓 御委嘱の書き物 一世一代の予言のかひもなく体

ばかりが七十一歳にて腕はまだ根っから坊ちゃんに御座候ゆゑ変な形に 出来あがり候 只今ともかくも 別便小包にて さし
いだし候

(中略)

拝受の御作品は只今演劇博物館へ寄贈いたし候
改めて当事者よりも御礼申入れ 永遠に
該館に珍藏いたすべき候 末筆ながら 重ねて
厚く御礼申上候

「拝受の御作品」とは、四月四日に渡されたと日記に書かれている「新水や空 第一帖」であろう。四月十二日に逍遙が揮毫した「岡本の額」は、もしかするとこの手紙に書かれている「御委嘱の書き物」ではないかとも考えられる。

耳鳥齋「絵本水や空」、一平「役者生命摘出」との比較

これまでに「新水や空」は、原画の所蔵先である早稲田大学坪内博士記

念演劇博物館の『図録第2集』^{一八}と、川崎市民ミュージアムの岡本一平展図録^{一九}に詳しく解説されている。「新水や空」が「役者生命摘出」を発展させたものであることは、これらの中ですでに指摘されている。確かに一平は「新水や空」を手掛ける前段階の「役者生命摘出」で、すでに耳鳥齋の「絵本水や空」に言及している。

これは安永頃の漫画家耳鳥齋の俳優似姿繪本『水や空』の雄大なる描き方と現代佛國後期印象派の主張する根源生命への接点とに感激せし一漫画家が、枚敷から凝視した今の日本の役者の上に、その感化のまゝを筆に行はうとするものである。なぐり書きや、ぞんざいなたづら書きと受取られては讀者に失敬に當る。で事實を申す。この二枚の結末を得るために五六十枚の書き直しをした。

書き損じをした枚数に比例して出来栄えが良くなるとは定まらぬ。古い在来の畫風から見てこれは諸君を輕蔑したものと受取られ兼ねまじき外形故、證據に申すのである。

では先づ最初は市村座の九月興業登場俳優より始めます。^{二〇}

「新水や空」の発表以降、一平の周囲で耳鳥齋の「絵本水や空」を取り上げる動きが起こっていた。先にも触れたが、宮尾しげをの編纂で耳鳥齋の『水や空』が一九三〇年一月六日に素描社から発行されている^{二一}。また、昭和九年十一月から昭和十一年十月の間に作成された『稀書解説 第九編』に「絵本水や空」が収められている。『稀書解説』とは近世の稀書の複製であり、発行者である「稀書複製会」の同人には坪内雄藏の名もある。^{二二}

一平が直に目にした耳鳥齋の「絵本水や空」自体を確認することは現時点で不可能だが、こうした複製本と見比べると、一平が耳鳥齋の描き方を意識した直接的な痕跡が「役者生命摘出」の、特に一九三二―四年頃の絵に表れていることが分かる。例えば、手の描き方である。澤村半平の手(図11)は、手のひら

よりも指が長く、一本の線を並べ、指先の丸みまで書かずに指が示されている。この手法は耳鳥齋に似ている(図12)。また、初期の「役者生命摘出」には直線に近い線が多用されている。墨の濃淡に幅があり、衣服の表現などに立体感が意識された「新水や空」と比べると、どちらかと言えば平面的である。この点が耳鳥齋の「絵本水や空」の全体的な画風に近いと言えるだろう。

耳鳥齋が描く役者の顔には、ある程度一定のパターンがある。耳鳥齋の絵は、おおまかな輪郭、□元、目元で顔の特徴を捉えている。鼻や眉が描かれたものは少ないが、場面や役者の衣装の特徴が明確であり、立ち居振る舞いの仕方によっても個性が示されている。

一平の「役者生命摘出」は体の大きさに比べて頭部が大きく、顔の描写に重点があったと感じられる。輪郭、□元、頬や顎の骨格、皺、眉のライン、鼻の大きさや高さ、目の形もすべて異なった線で描かれ、ひとりひとりの個性を捉えている。また、筆致も大胆で役者の動きをそのままに写したような即興性を感じさせるものが多い。それに対して、手の動き、着物の皺、時には背景や小道具まで事細かに描出された「新水や空」は「役者生命摘出」に緻密さが加わっているような印象を与えている。状況や衣装などの付随する情報を盛り込む方向性は、「役者生命摘出」よりも「新水や空」のほうが耳鳥齋に近い。

中村雁治郎の「紙屋治兵衛」のように、「役者生命摘出」と「新水や空」で配役が同じ場合はごく稀である^{三〇}。同じ役者で役が異なる場合、それらの多くは顔の特色を継承している。しかし、その継承の仕方は一辺倒のやり方ではない。市川中車や初瀬浪子^{三四}などでは、大胆すぎるデフォルメを和らげつつ、細かな線を加えて整えている。対照的に、市川左團次や坂東彦三郎^{三五}のように、更に大きく筆を動かし、戯画化する場合もある。たとえ一度描いた役者であっても、役者や役柄の特性を見つめ直し、一枚一枚を生かす描写の仕方を、それぞれに判断しながら描き進めていったことが窺えるのである。一平が「新水や空」の制作にあたり、何十枚と書き損じているこ

とは「ことわり書」を始め「一平全集月報」の中で幾度も伝えられている。更に『一平全集月報』に掲載された「岡本先生漫画苦心談」には、一平が「新水や空」について、次のように語ったとされている。

「僕は現實そのものを描かずに現實を粉々に砕いて洗ひ直し、エッセンスだけを探つて新らしく組み立てる。似顔でも如何に良く肖てゐても、好ましい感じの爲ない畫は捨てゝしまふ。どんな醜惡なやつでも、観る人に一種の好ましい畫風にする。この精練が實に苦勞なんだ」^{三六}

これは「新水や空」についての言葉であるのだが、「新水や空」に限らず、一平の漫画の本質を貫くものであると言えるだろう。

おわりに

岡本一平と芝居の関わりについては、東京朝日新聞に入社する前、東京美術学校を卒業してまもない頃に、一平が帝劇の背景部で背景描きをやっていることに遡ることができる^{三七}。また、一平は役者絵の制作と並行して「漫画脚本」と呼ばれる脚本風の物語をいくつも書いており、それらは『一平全集 第四巻』にも「漫畫戯曲集」としてまとめられている。また同書の巻頭には一九二七年十二月に築地小劇場人形座第三回公演「海馬鹿山馬鹿」の公演写真が掲載されている。昭和四年八月には帝劇で「刀を抜いて」が高田保の脚色で演じられ、主役を務めた中井哲の感想が『一平全集月報 第四號』に書かれている^{三八}。漫画で役者絵を描いたり、舞台裏を報じるだけではなく、脚本を手がけ、実際に上演されたという動きを眺めると一平自身、芝居についての造詣が相当に深かったものと思われる。今後の調査で一平の芝居への関心についても探っていきたい。先進社の『一平全集』は一九二九年五月二十六日の朝日新聞に広告が掲載され、六月五日から配本が始まった。全集の販売と「新水や空」の連載が同時進行と

いう状況下のためか、『一平全集月報』には「新水や空」に関する記述が多い。「新水や空」に人気があり、話題性があつたことの表れでもあろう。

先に触れた「役者生命摘出」「新水や空」とともに「紙屋治兵衛」として描かれた中村雁治郎は次のように記す。

私の似顔を描かれた時に、「なるだけ色男に頼みます」と云つたことがあましたが、でき上つたものを拝見すると非常に汚い、悲観しましたが、よく見ると自分乍らよく似てゐる、私の生命が出てゐると、後でつくづく感心しました。

その後気をつけて見ると、役者の似顔はずるぶんひどくかいてあるが皆生きて動いてゐる。しかも線が枯れてゐるまあ早く云へば、漫畫の中の南畫のやうなものかと考へたことがありました。^{二九}

またその隣には、市川猿之助の言葉もある。猿之助は「役者生命摘出」に二回描かれ、「新水や空」では「研辰の討たれ」として描かれている。「新水や空」に登場する役者たちがいつ、どの舞台で何の演目を演じたものが描かれているのか、一点一点の絵について調査することも課題である。

弟子を通じて一平に作品を依頼した逍遙は、この作品をどのように捉えていたのだろうか。先にも触れた中村八郎の文章の中で、逍遙は「似せて描くことは、それほど困難でないかも知れぬが其の人の癖を取つて描くことがなかなか出来るものでない」と話したと伝えられている^{三〇}。「癖」というのは、似顔絵がただ外面的な姿かたちを似せただけの似顔絵から抜け出す重要な要素である。逍遙が見出した「新水や空」の魅力は、一平自身がインタビュの中で「新水や空」について述べた「僕は現實そのものを描かずに現實を粉々に砕いて洗ひ直し、エッセンスだけを採つて新らしく組み立てる。^{三一}」という先にも引用した言葉の中にもある「エッセンス」の部分のひとつを言い当てていると感じられる。

一九二九年二月五月、一平は朝日新聞社の漫画全権としてロンドン軍

縮会議を取材するために日本を発つ。一平はロンドンで出会つた海外の漫画家に「新水や空」を挨拶として名刺代わりに差し出している^{三二}。当時としては最新作であり、このエピソードは、一平にとつての自信作でもあつたことを表している。

最後になりましたが、「新水や空」原画の作品調査、写真掲載の許可等、所蔵先である早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の塚田瑞穂氏、そして菊池明氏、松山薫氏に多大なご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

(きくち ゆか 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

【注】

一 『朝日新聞』一九二九年一月五日、引用。

二 『一平全集月報第四號』一九二九年九月五日、一頁引用。『増補 一平全集第二十卷』大空社、一九九一年、所収。

三 『一平全集月報第一號』一九二九年六月五日、四頁引用。(前掲書注二所収)

四 一平全集編輯部として鈴木氏亨、宮尾しげを、旭正秀、近藤日出造、上村勝彌、大橋道夫、野口活の名がある。『一平全集月報第十五号』一九三〇年八月十五日、二頁引用。(前掲書注二所収)

五 『一平全集月報第十二號』一九二九年五月十三日、二〇三頁参照。(前掲書注二所収)

六 宮尾は漫画家だけでなく、民俗研究者としても知られる人物である。この素描社発行の『水也空』の中で宮尾は「耳鳥齋について」という解説文を書いている。また、宮尾自身も耳鳥齋の「絵本水や空」を所蔵していたようである。昭和九年十一月から昭和十一年十月の間、稀書刊行会から出された『稀書解説第九編』には川喜田久太夫蔵の「絵本水也空」の上中下巻の複製本が作成され、「本書原本中巻は汚染の個所ありて、校合に苦心する所ありしが、幸に宮尾しげを氏蔵本によりて、これを正すことを得たり。」とある。中村幸彦、日野龍夫編『新編稀書複製會叢書 第三十七卷』臨川書店、一九九一年、三六五、三六六頁参照。

七 細かな言葉遣いが異なるほか、「そこで學藝部の了解を得て、この便宜により描きける次第である。」という一文が削除されている。

八 汐見洋の「悪魔」という文字は、原画と④では垂直に書かれているが、①③⑦では足にそい、斜めに書かれている。山本安英の「ソルウエーヂ」では、スカート部分の左上にひとつ点がかかっているが、原画と文藝春秋本には描かれていない。更に、朝日新聞と全集と素描社本には「曾我廼家五郎」の「郎」の字の延長線上に点が一つ付いているように見えるが、原画と④には見られない。

九 作品の形状については、すでに「51 岡本一平画『新水や空』」に詳しく紹介されている早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編集発行『図録第2集』一八一〜一八三頁参照。

一〇 『増補一平全集第十九巻』大空社、一九九一年、九九頁引用。

一一 財団法人逍遙協会編著『坪内逍遙事典』平凡社、一九八六年、九頁参照。

一二 『一平全集第七巻』（先進社、一九二九年）に「劇作家絵評判 六、坪内逍遙氏（四三頁）、「諸諺文人画譜 劇の行者」（八〇頁）、『増補一平全集第三十巻』に「あつさりした思ひ出」（二四三頁）などがある。

一三 『一平全集月報 第二號』一九二九年六月五日、二頁引用。（前掲書注二所収）

一四 中村八郎の名は逍遙日記も登場する。それによれば中村は、一九二九年の一月十五日、十六日、二月五日に坪内逍遙の元を訪れている。

一五 『逍遙日記 昭和四年〜昭和六年』財団法人逍遙協会編集・発行『未刊・坪内逍遙資料集五』二〇〇二年、二五〜二八頁、七八〜七九頁引用。

一六 一九二九年五月に大雄閣から出版された『散華抄』には逍遙の序詞「多調多彩／巳巳春日／雙柿叟題」が印刷されている。また、演劇博物館にはかの子自身が逍遙に謹呈したものとと思われる『散華抄』が所蔵されている。

一七 朝日新聞社文化企画局、川崎市民ミュージアム編集・発行『没後50年 現代マンガのパイオニア 岡本一平展』一九九七年、六〇〜六一頁引用。

一八 前掲注九参照。

一九 「人物描写の名手①「役者生命摘出」から「新水や空」へ」前掲書注一七、三十四頁参照。

二〇 「役者生命摘出その一序言」『新演藝』第七巻第十号、一九二二年、二二〜二三頁。

二一 前掲注六参照。

二二 中村幸彦、日野龍夫編『新編稀書複製會叢書 第一巻』臨川書店、一九八九年、「刊行の趣意」参照。

二三 「役者生命摘出」として、雁治郎の「紙屋治へゑ」は『演劇・映画』第一巻第五号（ラトン社、一九二六年）に掲載されている。

二四 「俳優生命摘出」『新演藝』第八巻第一号に市川中車の「鎮西八郎為朝」、「役者生命摘出」『新演藝』第八巻第一号、二三頁に初瀬浪子の「妻お染」が掲載されている。

二五 「役者生命摘出」『新演藝』第八巻第七号（玄文社一九二三年）に市川左團次の「儒者熊澤

蕃山」、第九巻第十一号に坂東彦三郎の「金地院崇傳」が掲載されている。

二六 『一平全集月報 第三號』一九二九年八月五日、六〜七頁引用。（前掲書注二所収）

二七 「學校出の背景描き」『新演藝』第六巻第二号、一九二二年二月、六〜七頁参照。

二八 中井哲「刀を抜いて」に就いて『一平全集月報第四號』一九二九年九月五日、六頁参照（前掲書注二所収）。また、この七頁にも三宅三郎による「刀を抜いて」についての記事がある。

二九 中村雁治郎「生きた藝術」『一平全集月報第一號』一九二九年六月五日、三頁引用。（前掲書注二所収）

三〇 前掲注一三参照。

三一 前掲注二六参照。

三二 ロンドン軍縮会議のとき、デルソとケレンという漫画家を重徳特派員から紹介され、「漫画家の挨拶の常として筆者は拙畫集「新水や空」を名刺代りに差し彼等はジュネーヴ會議の畫集をよこした。ところが二人は拙画を認めて呉れて一しよに仕事をしようではないかと申込んで来た。」と書いている。岡本一平「西洋の現代漫畫と漫畫家二」『東京朝日新聞』一九三三年四月二十三日

【掲載図版の出典】

図1 朝日新聞一九二九年一月十一日『朝日新聞縮刷版 昭和四年一月』より転載

図2 『一平全集 第四巻』先進社、一九二九年、一三頁より転載

図3 『新水や空 俳優の部』文藝春秋社・座右寶刊行会、一九二九年より転載

図4 『新水や空 俳優の部』素描社、一九三〇年より転載

図5 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「新水や空」原画

図6 『新水や空 俳優の部』文藝春秋社・座右寶刊行会、一九二九年より転載

図7 坪内逍遙「自家心古」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「新水や空」原画より

図8 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「新水や空」原画上巻

図9 坪内雄三寄贈票 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「新水や空」原画より

図10 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「新水や空」原画箱書き

図11 『一平全集 第四巻』先進社、一九二九年、一〇二頁より転載

図12 耳鳥齋「絵本水や空 中」中村幸彦、日野龍夫編『新編稀書複製會叢書 第三十七巻』臨川書店、一九九一年より転載

図版

【図1】『朝日新聞』一九二九年一月十一日



【図2】『二平全集 第四巻』先進社



【図3】『新水也空 俳優の部』文藝春秋社・座右實刊行会



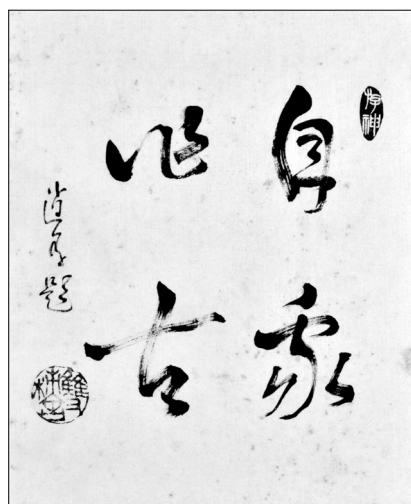
【図4】『新水也空 俳優の部』素描社



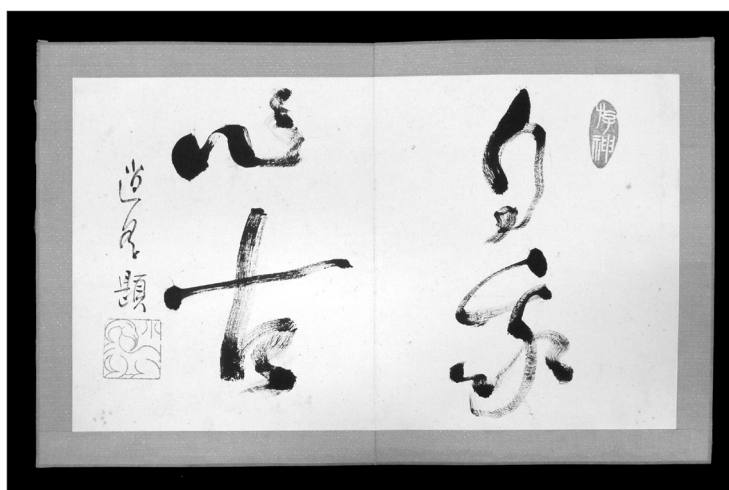
【図5】『新水や空』原画 坪内博士記念早稲田大学演劇博物館所蔵



【図6】文藝春秋社・座右實刊行会本収録 坪内逍遙 序詞



【図7】原画収録 坪内逍遙 序詞



【図8】「新水や空」原画上巻



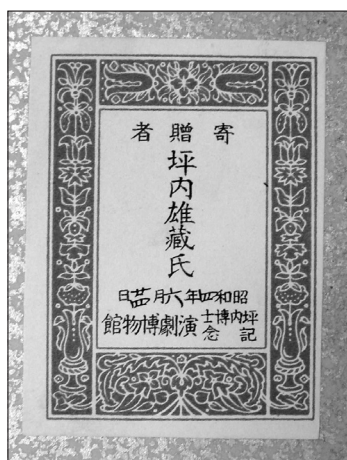
【図10】岡本一平による箱書き



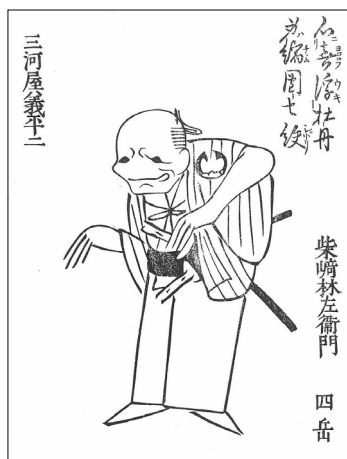
【図11】岡本一平「役者生命摘出」より澤村宗十郎



【図9】寄贈票



【図12】耳鳥齋「絵本水や空 中」より柴崎林左衛門



岡本一平「新水や空」に関する年表

＊この年表は、『増補 一平全集 第二十巻』（大空社、1991 年）所収の『一平全集月報』および清水勲・湯本豪一作成「岡本一平年譜」を参照し、「逍遙日記 昭和四年～昭和六年」（財団法人逍遙協会編集・発行『未刊・坪内逍遙資料集 五』2002 年）から一平や「新水や空」に関する該当部分を引用し、作成したものです。

1929(昭和4) 年

1月 5日	①朝日新聞「新水や空」（俳優の部）連載開始
1月15日	逍遙日記／午後 中村八郎露木泊…
1月16日	逍遙日記／午後 揮毫 不成 石川宰三郎来…其前中村八郎又来
2月 5日	逍遙日記／夜、中村八郎来、大毎より頼み…
4月 4日	逍遙日記／午後 岡本一平来訪、「新水や空」第一帖持参、かの子の散華抄の序を頼まれ、 其代りに題字を書くべしと約す、夕刻に絛を携へて再来
4月 5日	逍遙日記／揮毫 伊地知の First Folio トビラに「無價宝珠」又岡本の妻かの子の散華抄の題字「多調多彩」いづれも ただちに送付
4月 7日	①朝日新聞「新水や空」（俳優の部）連載終了 逍遙日記／揮毫 春城の小帖と曾我兄弟遺蹟碑と岡本の「多調多彩」の下書
4月12日	逍遙日記／午前午後 揮毫 丸屋の額 岡本の額 伊地知の額
4月13日	坪内逍遙 岡本一平宛書簡（委嘱の書き物の送付について、演劇博物館への寄贈の礼）
4月14日	逍遙日記／岡本一平より礼状
4月27日	②『朝日新聞』に「新水や空 政治家の部」連載開始
6月 5日	『一平全集月報 第一～三號』発行 ＊一號：中村雁治郎「生きた藝術」、旭正秀「一平全集編纂について」 ＊二號：中村八郎「岡本一平畫伯の漫畫漫文 坪内博士の言葉」 ＊三號：「岡本先生漫畫苦心談」
6月24日	演劇博物館蔵「新水や空」原画に添付された寄贈票
6月28日	②『朝日新聞』「新水や空 政治家の部」連載終了
8月	「刀を抜いて」帝劇にて上演
9月 5日	『一平全集月報 第四號』発行 ＊一記者「家庭に於ける岡本一平先生」、中井哲「刀を抜いて」に就いて」、三宅三郎「八月帝劇の新國劇」
10月 5日	③『一平全集 第四巻』（「新水や空」（俳優の部）含む演劇漫畫漫文集、漫畫戯曲集）先進社、発行 『一平全集月報 第五號』発行
11月	演劇博物館蔵「新水や空」原画 箱書きの記載
11月 7日	『一平全集月報 第六號』発行
11月15日	逍遙日記／午前 岡本一平、其妻かの子と来訪、「散華抄」豪華版持参、来月二日挙家洋行、二年間滞留云々
11月21日	逍遙日記／東京駅着（十二時）駅にて食事を済まし帰宅、すぐ演博行、河竹に岡本の「新水や空」下巻及び田中穂 積へ頼みの良寛二枚を渡す。
12月 2日	ロンドン軍縮会議を朝日新聞特派員として取材のため、東京を出発
12月 5日	④『新水也空 俳優の部』⑤『新水也空 政治家の部』文藝春秋社・座右寶刊行会、発行 ロンドンに向けて、神戸港を出発

1930(昭和5) 年

1月 6日	⑥『一平全集 第十巻』（「新水や空 政治家の部」含む政治時事漫畫文集）先進社、発行 ⑦『新水也空 俳優の部』⑧『新水也空 政治家の部』素描社、発行
2月 6日	宮尾しげを編纂 耳鳥齋『水也空』素描社、発行
5月13日	『一平全集月報 第十二號』発行 ＊鈴木氏亨「新水也空」に就いて」
8月15日	『一平全集月報 第十五號』発行 ＊「終りにのぞんで」の中に一平全集編輯部のメンバー記載
9月12日	⑨『新水也空 演劇篇』先進社、発行

1931(昭和6) 年

1月12日	⑩『新水也空 政治篇』先進社、発行
-------	-------------------

美濃加茂市民ミュージアム 紀 要

第 11 集

2012 年（平成 24）3 月発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1（〒 505-0004）

TEL 0574-28-1110 / FAX 0574-28-1104

<http://www.forest.monokamo.gifu.jp/>

印 刷 有限会社 永田印刷